

[027]報告

齊藤, 信浩
九州大学留学生センター : 准教授

脇坂, 真彩子
九州大学留学生センター : 講師

郭, 俊海
九州大学留学生センター : 教授

大神, 智春
九州大学留学生センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4783544>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 27, pp. 75-162, 2019-03. 九州大学留学生センター
バージョン :
権利関係 :



病院地区・日本語コース

Japanese Language Courses at Hospital campus

齊 藤 信 浩*

1. はじめに

病院地区には、医学部・薬学部・歯学部の医系3学部が設置されている。学部所属の留学生は基幹教育で開講されている日本語科目を受講できるが、病院地区に所属する大学院留学生は日本語の訓練を受けることができないため、病院地区の留学生の日本語補講の目的で、2017年度後期より「病院地区・日本語コース」が開講された。コース設置の経緯については、齊藤（2018）に詳述してあるので参照されたい。今回の報告から、コースの内容について詳しく記載していく。

2. コースの構成

2. 1. クラスとレベル数

開講レベルは初級2クラス（Japanese 1, Japanese 2）である。これについては、コース設置当初から3期しか経っていないため、変更はない。使用教科書は『Genki I 2nd edition』（2011；スリーエーネットワーク）で、ワークブックも同シリーズのものを使用している。Japanese 1は、ゼロ初級から開始し、単文レベルの産出ができるように持つて行くのがJapanese 1の目標であり、Japanese 2は受講者のレベルにばらつきは出るが、Japanese 1で学習した単文レベルの文から、普通形から依頼や許可など、対話者を想定した使用に発展させていくのがJapanese 2の目標である。コースの内容は以下、表1の通りである。

表1 コース内容

レベル	内容	教科書
日本語1 Japanese 1	ひらがな・カタカナから始め、数字（時間・歳）、月・日・曜日、基礎語彙を導入し、te-form による単文の文産出の訓練を行う。	Genki I (L.1-L6)
日本語2 Japanese 2	short form, informal speech から Past tense を導入し、活用形を固めつつ、依頼・義務・許可・経験等の文末表現を広げる。	Genki I (L.7-12)

*九州大学留学生センター准教授

2. 2. 開講期間と受講者募集について

コース設置からの全ての開講期間を以下に記す。各回90分、週2回、10週間で20コマの授業を提供する。第1期の募集は全てオンライン（簡易プレテ）上で処理したが、Japanese 1の学生はオンラインプレースメントテストの受験自体が不要なため、第2期以降はJapanese 1の受講希望者には、メールで教務補佐へ直接申請するようにして名簿を作成した。この方法は煩雑であるため、今後、Japanese 1の申請方法を工夫していきたい。

第1期：2017年11月2日～2018年1月26日（オンラインテスト10月13～10月16日）

第2期：2018年5月8日～2018年7月13日（オンラインテスト4月19～4月23日）

第3期：2018年11月1日～2019年1月29日（オンラインテスト10月17～10月22日）

2. 3. 受講者数について

2018年5月時点での医系3学部の修士課程と博士課程に在籍する留学生数は、医学府41名、歯学府31名、薬学府21名であり、これ以外に、研究生として、医学府5名、歯学府1名、薬学府3名、合わせて102名の留学生が大学院（学府）留学生として所属している。コース設置から現在までの受講者数を以下の表に示す。

表2 補講日本語コースの受講者数

開講期		日本語 1	日本語 2
第1期	2017年度 後期	3名	7名
第2期	2018年度 前期	4名	5名
第3期	2018年度 後期	10名	12名

2018年度後期は、博多駅のサテライトキャンパスで経済学府のビジネススクールが運営している交換留学プログラムの学生が9名参加したことにより、Japanese 1が10名のクラスとして開講できたが、このプログラムの学生の参加がなければ、医学府の1名のみの受講となってしまう、クラス維持ができない可能性があった。残念ながら、後期のみの交換留学プログラムで、前期の参加は見込めない。Japanese 1のレベルは非常に学生数が少ないが、一方で、補講日本語の目的として、最低限の生活保障の日本語を九州大学として提供するというセーフティネットの趣旨からも Japanese 1を不開講にすることは難しい。

3. 今後の改善点

3. 1. クラス数の増設の可能性について

コースのレベルはこれ以上の増設はないものと考えている。理由として、2. 3. で言及したように、受講者の絶対数が少ないこと、加えて、学期を越えての継続受講が見られないことが挙げられる。こ

れは留学生の在籍期間に大きな理由がある。まず、交換留学生は、そもそもの留学期間が半年ないし1年であるため、継続受講は不可能である。次に、研究生は主に秋来日が多いが、半期受講した後、学府に合格をすると、1年前期の修士課程の授業負担が大きいため、日本語補講の受講を諦めるケースが多い。他校へ合格するケースもある。次に、修士課程は2年間であるが、修士の留学生の多くは1年次に日本語コースを受講しており、2年次の修士論文の段階になると日本語補講に参加する時間的余裕がなくなる。博士課程の学生のみ、比較的、長期で受講する傾向が見られるが、これも研究の負担のため、3期以上の継続受講をする学生は殆ど見られない。このような学生のニーズ面からも、予算面からも、現状の初級2レベル2クラスで実施するのが妥当であると考える。

3. 2. オンラインシステムの改善について

2. 2. でオンラインによって受講登録を処理したとあるが、Japanese 1は自己申請で教務補佐へ連絡し、Japanese 2は簡易プレテで処理をし、コーディネータが直接受講者へメールで連絡をするという方法をとったため、人力による部分が大きかった。この改善のために、箱崎キャンパスの閉鎖に伴って、箱崎JTCsで使用していたシステムが不要になっているため、箱崎JTCsで使用していたオンラインシステムを馬出用に転用することを考えている。

3. 3. まとめ

コース開設後、3期であるため、当面は現状の運営で進めるが、各キャンパスごとの特徴や事情が次第に反映されてくると予測される。病院地区には100名あまりの大学院留学生が所属している。過去の補講コースの運営の経験からそのキャンパスの4分の1程度の学生が受講する傾向が見られる。これは日本語学習を必要としない留学生（既に日本語力が十分に高い者、英語のみで日本語学習に興味がない者）や、都合が合わなかった留学生（授業日程が合わない者、他の課題で手が回らない者）などがあるため、100名の留学生が在籍していても60～70名が受講するということにはならない。およそ20～25名程度の受講を期待している。しかし、現状では医系3学からは10名前後の受講者に留まっており、より広報に力を入れる必要性を感じている。

参考文献

斉藤信浩（2018）「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』26, 103-104.

Japanese Academic Courses (JACs) /

言語文化基礎科目・日本語

Japanese Academic Courses (JACs) / Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese

脇 坂 真彩子*

1. はじめに

「Japanese Academic Courses / 言語文化基礎科目・日本語（以下、JACs）」は九州大学伊都キャンパスで開講される単位取得を目指す学部留学生向けの日本語コースである。本コースは、2017年度までは九州大学留学生センターが提供する各プログラムに所属する学生を主な対象とした日本語コースであったが、2018年度より基幹教育の日本語科目および農学部・工学部学士課程国際コースの日本語科目と統合し、基幹教育の「言語文化基礎科目・日本語」の科目となった。

2018年度より、本コースは九州大学の学部正規留学生（学士課程国際コースの学生を含む）、留学生センターが提供するプログラム（Japan in Today's World Program : JTW、日本語・日本文化研修コース : JLCC、日本語研修コース、日韓理工系プログラム）の参加学生、大学間／部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部所属する交換留学生を対象とし、日本語教育を提供している。JACs は総合日本語（I コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、作文（W コース）の4つのコースから構成され、入門から上級まで8段階の幅広いレベルのクラスが展開されている。コースはクォーター制で開講され、各クォーター履修後には九州大学から成績と1単位が授与される。以下に、2018年度（平成30年度）の実施状況を報告する。

2. コースの概要

2. 1. JACs のコース編成

本コースは総合日本語（I コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、作文（W コース）の4つのコースから成る。表1は2018年度春学期（Q1）と夏学期（Q2）のコース編成を、表2は秋学期（Q3）と冬学期（Q4）のコース編成を示している。1コマ90分の構成であり、クォーター制に基づき、各クォーターで週に2回を7.5週、計15回授業が行われる。括弧内の数字はクラス数を示している。なお、各クラスの科目名は留学生センターと基幹教育で異なっているが、本稿では留学生センターで使用し

* 九州大学留学生センター講師

ている科目名を使用する。科目名の一覧表は本稿稿末を参照されたい。

表1 コース編成（2018年度春学期・夏学期）

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
入門	I-1 (1)	K-1+2 (1)		
初級 1	I-2 (1)		S-2 (1)	
初級 2	I-3 (1)	K-3 (1)	S-3 (1)	
中級入門	I-4 (1)	K-4 (1)	S-4 (1)	
中級 1	I-5 (1)	K-5 (1)	S-5 (1)	W-5 (1)
中級 2	I-6 (1)	K-6 (1)	S-6 (1)	W-6 (1)
上級入門	I-7 (1)	K-7 (1)	S-7 (1)	W-7 (1)

表2 コース編成（2018年度秋学期・冬学期）

レベル	総合 (I コース)	漢字 (K コース)	会話 (S コース)	作文 (W コース)
入門	I-1 (2)	K-1+2 (1)		
初級 1	I-2 (2)		S-2 (1)	
初級 2	I-3 (2)	K-3 (1)	S-3 (1)	
中級入門	I-4 (2)	K-4 (1)	S-4 (1)	
中級 1	I-5 (2)	K-5 (1)	S-5 (1)	W-5 (1)
中級 2	I-6 (1)	K-6 (1)	S-6 (1)	W-6 (1)
上級入門	I-7 (2)	K-7 (1)	S-7 (1)	W-7 (1)
上級	I-8 (1)	K-8 (1)	S-8 (1)	W-8 (1)

2. 2. 使用教材

各クラスでの使用教材は表3の通りである。

表3 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
I-1	『初級日本語げんき I (第2版)』	K-1+2	『Essential Japanese Kanji vol.1』
I-2	『初級日本語げんき I、II (第2版)』		『げんき I (第2版)』
I-3	『初級日本語げんき II (第2版)』	K-3	『Basic Kanji Book vol.1』
I-4	『中級へ行こう (第2版)』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1、vol. 2』
I-5	『中級を学ぼう (中級前期)』	K-5	『Basic Kanji Book vol. 2』
I-6	『中級を学ぼう (中級中期)』	K-6	『上級へのとびら きたえよう漢字力』
I-7	『日本語5つのとびら TOBIRA 中上級編』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
I-8	自主作成教材を使用	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』

会話	使用教材	作文	使用教材
S-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	W-5	『表現テーマ別にほんご作文の方法』
S-3	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	W-6	『小論文の12のステップ』
S-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-7	『この一冊できちんと書ける！論文・レポートの基本』
S-5	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-8	自主作成教材を使用
S-6	『日本語上級話者への道』		
S-7	自主作成教材を使用		
S-8	自主作成教材を使用		

2. 3. 学生区分／所属別の受講可能コース

JACsでは学生の区分・所属によって、受講できるコースやレベルに制限がある。表4に学生区分／所属別の受講可能コースを示す。表内の「○」はプレースメントテストを受験した上で、そのコースを受講できることを示し、「×」はそのコースが受講できないことを示している。ただし、学部正規留学生と春入学の共創学部生はプレースメントテストを受験しないため、表内に示すようにクォーターごとに受講するクラスが指定されている。

表4 受講可能コース一覧

学生区分／所属	I コース	K コース	S コース	W コース
留学生センター生 (JTW、JLCC、研修コース、日韓プログラム)	○	○	○	○
学部所属交換留学生	○	○	○	○
学部正規留学生	I-7 (Q3&4)	×	×	×
農学部・工学部学士課程国際コース (IUPE) 1年生	○	○	×	×
農学部学士課程国際コース (IUPE) 2年生	○	○	×	×
共創学部 (春入学)	I-7 (Q1&2) I-8 (Q3&4)	×	×	×
共創学部 (秋入学)	○	○	○	○

2. 4. 開講日程

2018年度の各クォーターの開講日程は以下、表5の通りである。

表5 授業の開講スケジュール

クォーター	開講期間
春学期 (Quarter 1)	2018年 4月10日 ~ 2018年 6月 6日
夏学期 (Quarter 2)	2018年 6月12日 ~ 2018年 8月 2日
秋学期 (Quarter 3)	2018年10月 3日 ~ 2018年11月29日
冬学期 (Quarter 4)	2018年12月 5日 ~ 2019年 2月 8日

2. 5. 履修開始までの手続き

JACsの履修には履修希望者本人が春学期（Q1）と秋学期（Q3）の始めに、オンラインによる受講申し込みを行う必要がある。各クォーターのオンライン受講申し込み期間とプレースメントテストの受験期間、オリエンテーションの日程は表6の通りである。

表6 プレースメントテストとオリエンテーションの日程

クォーター	オンライン受講申し込み及び オンラインプレースメントテスト	漢字テスト	インタビュー テスト	オリエンテー ション
春学期（Q1）	2018年 3月30日～2018年 4月 4日	4月5日		－
夏学期（Q2）	2018年 6月 7日～2018年 6月10日	6月8日	－	－
秋学期（Q3）	2018年 9月18日～2018年 9月26日	9月27日		
冬学期（Q4）	2018年11月25日～2019年 2月 8日	11月30日	－	－

その後の履修開始までの手続きは学生区分／所属によって異なっている。以下に、留学生センター生および学部所属交換留学生、農学部・工学部の学士課程国際コース生、学部正規留学生、共創学部生に分けて、それぞれ履修開始までの手続きについて説明する。

2. 5. 1. 留学生センター生・学部所属交換留学生

留学生センター生および学部所属交換留学生は、2017年度まで留学生センターで使用していたオンラインシステムを継続して、オンラインの受講申し込みとプレースメントテストを行った。受講申込者はオンラインで申し込み手続きを完了後、希望するコースと前の学期の履修状況に応じて、必要なプレースメントテストを受験した。プレースメントテストでは、まず全コースの履修に必須の文法・聴解・読解のテストがオンラインシステムを使用して行われ、その後、KコースおよびWコースの履修希望者には漢字テスト（筆記）、Sコースの履修希望者にはインタビューテストが対面で実施された。システムエラーや様々な事情でオンラインテストが受けられなかった学生は、オンラインのバックアップテストを受験した。また、秋学期（Q3）には、日本語研修コースと日韓プログラムの参加学生はJACs全体のオリエンテーションに参加した。クラス分け結果は留学生センターのオンラインシステムを通じて通知された。

2. 5. 2. 農学部・工学部の学士課程国際コース生

農学部・工学部の学士課程国際コース（IUPE）に所属する学生は2018年秋学期（Q3）からJACsを受講するようになった。秋学期（Q3）はコース統合後はじめての学期であったため、暫定的に設けられた2つのシステムを使用して、オンラインで受講申し込みとプレースメントテスト（文法・聴解・読解）を行った。その後、JACsの全体オリエンテーションに参加し、漢字テスト（筆記）を受験した。クラス分けの結果は、農学部・工学部の1年生には基幹教育教務係の担当者からメールで通知され、農学部2年生には学生ポータルシステムと公用掲示板への掲示により通知された。

2. 5. 3. 学部正規留学生

学部正規留学生は2018年秋学期（Q3）からJACsを履修するようになった。これらの学生はプレースメントテストなしで特定のレベルのクラスを履修することになっている。まず、2018年9月18日

～9月27日にオンラインの「クラス分けシステム」に登録し、JACsの全体オリエンテーションに参加した。クラス分けの結果は学生ポータルシステムと公用掲示板への掲示により通知された。

2. 5. 4. 共創学部生

共創学部生は春入学生と秋入学生で日本語科目の履修単位数や履修のプロセスが異なっている。春入学の学生はプレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっている。2018年度春学期（Q1）と夏学期（Q2）はI-7（Integrated Courses: Pre-Advanced A, B）を受講し、秋学期（Q3）と冬学期（Q4）はI-8（Integrated Courses: Advanced A, B）を受講した。一方、秋入学の学生は学生本人がI、K、S、Wの4つのコースの中から希望するコースを選択し、選んだコースによって必要なプレースメントテストを受験した。受講のプロセスは上に記した留学生センター生および学部所属の交換留学生と同様である（2. 5. 1. 参照）。

2. 6. 夏学期（Quarter 2）と冬学期（Quarter 4）のプレースメントテスト

夏学期（Q2）と冬学期（Q4）のプレースメントテストは留学生センターが提供するプログラムに所属する学生（JTW、研修コース、日韓プログラム）と学部所属交換留学生のみを対象に実施した。JACsは4つのクォーターから構成されるが、カリキュラムの内容は学習効果を考慮して、学期ごと（春学期（Q1）と夏学期（Q2）、もしくは秋学期（Q3）と冬学期（Q4））に連続しているため、受講生は基本的に学期を通して同じレベルのクラスを履修する。しかし、上に挙げた対象学生は、在籍期間が半年～1年と短いため、学習意欲の高い学生の動機付けになるように上のレベルに移動できるチャンスを設けているのである。2018年度夏学期（Q2）と冬学期（Q4）は、IコースとKコースでプレースメントテストを実施した。テスト受験の条件は前のラウンドでクイズの平均点および期末テストの点数が90%以上取れていることとし、これらの2つの条件を満たした学生はプレースメントテストを受験した。

3. 履修者数および履修者の内訳

2018年度春学期（Q1）の最終履修者数は64名（延べ156名）、秋学期（Q3）の最終履修者数は、127名（延べ283名）であった。

3. 1. 履修者数

春学期と秋学期のクラス別履修者数を表7と表8に示す。

表7 2018年度春学期（Q1）クラス別履修者数（延べ履修者数）

	総合コース		会話コース		漢字コース		作文コース	
入門	I-1	7			K-1+2	3		
初級1	I-2	6	S-2	8				
初級2	I-3	5	S-3	9				
中級入門	I-4	8	S-4	8				
中級1	I-5	13	S-5	10	K-5	5	W-5	9
中級2	I-6	9	S-6	4	K-6	11	W-6	4
上級入門	I-7	5	S-7	7	K-7	4	W-7	3
総計 156名								

表8 2018年度秋学期（Q3）クラス別履修者数（延べ履修者数）

	総合コース		会話コース		漢字コース		作文コース	
入門	I-1	22			K-1+2	19		
初級1	I-2	7	S-2	7				
初級2	I-3	19	S-3	11				
中級入門	I-4	14	S-4	10				
中級1	I-5	13	S-5	11	K-5	17	W-5	5
中級2	I-6	5	S-6	8	K-6	11	W-6	11
上級入門	I-7	26	S-7	7	K-7	9	W-7	6
上級	I-8	3	S-8	7	K-8	2	W-8	4
総計 283名								

なお、夏学期（Q2）は、5名がプレースメントテストの受験を希望し、そのうち1名が上のレベルへ移った。冬学期（Q4）は、5名が受験を希望し、その全員がプレースメントテストを受験して上のレベルへ移った。

3. 2. 履修者の内訳（出身地域別）

表9は履修者を出身地域で大別し、国籍別にまとめたものである。履修者の出身地域はヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、オセアニア、アフリカと様々である。

表9 出身地域別の履修者数

ヨーロッパ	春学期	秋学期	アジア	春学期	秋学期
フランス共和国	7	9	フィリピン共和国	1	1
英国	5	7	マレーシア	1	1
ドイツ連邦共和国	2	6	ミャンマー連邦	1	0
ロシア連邦	2	0	日本国	0	1

スウェーデン王国	1	4
イタリア共和国	1	2
オランダ王国	2	1
アイルランド	1	1
ベルギー王国	1	1
計	22	31
アジア	春学期	秋学期
大韓民国	6	26
中華人民共和国	2	25
タイ王国	0	7
台湾	3	7
インドネシア共和国	3	5
ベトナム社会主義共和国	1	4
インド	1	2
香港	2	2
シンガポール共和国	0	1
シリア・アラブ共和国	0	1

モンゴル国	0	1
計	21	84
北アメリカ	春学期	秋学期
アメリカ合衆国（米国）	14	8
ホンジュラス共和国	1	0
計	15	8
南アメリカ	春学期	秋学期
メキシコ合衆国	2	0
計	2	0
オセアニア	春学期	秋学期
オーストラリア連邦	2	1
トンガ王国	1	0
計	3	1
アフリカ	春学期	秋学期
エジプト・アラブ共和国	1	1
タンザニア連合共和国	0	1
マダガスカル共和国	0	1
計	1	3
合計	64	127

3. 3. 履修者の内訳（身分別）

表10と表11は、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の身分別の履修者数を学期ごとにまとめたものである。

表10 春学期（Q1）身分別の履修者数

留学生センター生	54名
Japan in Today's World Program (JTW)	41
日本語研修コース	10
日本語・日本文化研修コース (JLCC)	3
共創学部（春入学生）	2名
学部・大学院所属の大学間交換留学生	8名
工学部	2
文学部	2
理学部	2
経済学部	1
地球社会統合科学府	1
計	64名

表11 秋学期（Q3）身分別の履修者数

留学生センター生	76名
Japan in Today's World Program (JTW)	43
日本語・日本文化研修コース (JLCC)	19
日本語研修コース	7
日韓プログラム	7
学部正規留学生	16名
学部正規留学生	16
農学部・工学部学士課程国際コース (IUPE)	28名
工学部1年生	13
農学部1年生	6
農学部2年生	9
共創学部	6名
春入学生	2
秋入学生	4
学部別所属交換留学生	4名
文学部	2
経済学部	1
工学部	1
計	127名

4. 2018年度に行った変更

2018年度春学期に九州大学に共創学部が新設され、共創学部に所属する留学生が本コースを受講することになったことをきっかけに、JACsは基幹教育の日本語科目および農学部・工学部の学士課程国際コースの日本語科目と統合し、基幹教育の「言語文化基礎科目・日本語」となった。統合に伴い行ったさまざまな変更について、以下に記述する。

4. 1. ラウンド制からクォーター制への移行

JACsは2017年度までは留学生センター独自の4ラウンド制で開講され、1クラスあたり週に2～3回（1コマ90分）の授業が6週間（学期で12週間）行われていた。しかし、2018年度春学期からは基幹教育のクォーター科目の枠組みに合わせ、すべてのコースを週に2回7.5週間の構成に変更し、授業の開講日程も基幹教育の学年暦にあわせて調整した。その結果、これまで総合日本語コース（I-1～I-4）では各学期で36回（週3回12週間）行っていた授業が30回（週2回15週間）に減少した。一方で、その他のコースでは、以前は各学期で24回（週2回12週間）行っていた授業が、各学期で30回（週2回15週間）に増加した。また、クォーター制に変更したことにより、JACsの科目を履修すれば、九州大学から各クォーターで1単位の正式な単位が授与されるようになった。

4. 2. 上級レベル（8レベル）およびクラスの増設

学部正規留学生と農学部・工学部の学士課程国際コース生、共創学部生の履修が始まるにあたり、2018年度秋学期（Q3）から日本語レベルの高い学生にも対応できるよう、すべてのコースで上級レベル（8レベル）を新たに設けた。また、各コースの定員を考慮して、総合日本語コース（I-1、I-2、I-3、I-4、I-5、I-7）のクラス数を2クラスに増やした。実際に、秋学期には合計50名（延べ82名）受講者が増加したため、クラスの増設は適切だったと考えている。I-1～I-5では、基本的には一方のクラスを農学部・工学部の学士課程国際コース生、もう一方のクラスを留学生センター所属学生と共創学部生、学部所属の交換留学生で構成した。

4. 3. カリキュラムの見直し

クォーター制への移行（4. 1. 項）と上級レベルの増設（4. 2. 項）に伴い、各コース・クラスで授業内容とスケジュールの見直しを行った。I-1～I-4では、授業回数の減少により各学期に学ぶ内容が極端に減らないよう配慮し、これまでと同じ範囲をカバーできるよう各クラスで授業内容とスケジュールの変更を行った。I-5～I-7およびKコース、Sコース、Wコースでは、増加した6回分の内容を各クラスで追加し、授業スケジュールを調整した。さらに、秋学期（Q3）からすべてのコースに上級レベル（I-8、K-8、S-8、W-8）を新設したのに伴い、コースごとにミーティングを行い、担当者間で改めて各クラスの授業内容とレベル、到達目標を確認・整理した。

4. 4. プレースメントテスト日程の変更とオリエンテーションの実施

JACs がクォーター制に移行し、授業の開講日程を基幹教育に合わせたことに伴い、プレースメントテストの日程も見直しが必要となった。授業期間が各学期で12週間から15週間に増えたことにより、授業開始日も早めざるを得なくなったからである。春学期（Q1）については、4月の第2週目から授業を開始できるよう、2017年度までは2日間に渡り実施してきたオンサイトのプレースメントテストを1日で終える日程に変更した。まず、2018年4月5日の9時～12時にインタビューテストを実施し、その後、15時～16時に漢字テストを行った。秋学期（Q3）については、10月の第1週目から授業を開始できるよう、オンライン受講申し込みとオンラインプレースメントテスト期間を約1週間早めた。また、オンサイトのプレースメントテストも、さまざまな所属の学生が出席しやすいように1日で終える日程に変更した。さらに、秋学期（Q3）は各学部に所属する正規留学生（国際コースの留学生を含む）がJACsを受講する初めての学期であったため、オンサイトのプレースメントテストと同日に、JACsの全体および各コース・プログラムのオリエンテーションを実施し、受講規定や履修に関する注意点を説明した。

4. 5. 夏学期（Q2）のJTW生への特別対応

4. 1. 項に記したように、2017年度春学期以降、JACsは基幹教育の学年暦およびクォーター制の枠組みに合わせて開講されることになった。しかし、Japan in Today's World (JTW) は7月末にプログラムを修了することから、JTW生に関しては受講期間を7月第3週目末までとし、残り3回分の授業

については特別課題を提出することで15回出席したとみなし単位を認定することとした。また、夏学期（Q2）の期末テストに関しては、すべてのコースで第3週目末に実施することとした。JTW生の特別課題は、夏学期（Q2）のはじめに各コースの担当教員が特別課題の内容を通知し、JACsの最終授業日をその提出期限とした。課題の提出方法は、担当教員に手渡し／メールで送付するか、JTWオフィスに設置された課題提出用のメールボックスに提出することとした。しかし、帰国前の慌ただしい時期に課題を提出しなければならないことから、数名の学生は提出しないまま帰国してしまい、帰国後に課題を送ってもらう事態となった。来年度は各クラスで学生への課題の締切り日の周知を徹底したい。

4. 6. 学部所属交換留学生の単位の出し方の変更

2017年度までは、各学部所属の大学間・部局間交換留学生は、留学生センターの科目としてJACsを受講し、各学期終了後に留学生センター委員会で成績と単位の認定を行っていた。しかし、JACsが基幹教育科目になるのに伴い、各学部所属の大学間・部局間交換留学生は、基幹教育の科目名でJACsを履修し、成績と単位も基幹教育から授与されることとなった。

5. 今後の課題

今後の課題として、以下の4点を挙げる。

5. 1. 新規オンライン受講申し込み・オンラインテストシステムの構築

2018年度秋学期はJACsと基幹教育の日本語科目および農学部・工学部学士課程国際コースの日本語科目が統合後はじめての学期であったため、移行措置として4つの暫定的なシステムを使用して、オンラインによる受講申し込みとプレースメントテストを行った。しかし、今後は、全ての受講生がオンラインで受講申し込みとプレースメントテストの受験ができるシステムを開発し、運用したいと考えている。今年度のコースの運営状況を踏まえてシステムを開発し、来年度から新たなオンラインシステムの運用を開始する予定である。

5. 2. S-1クラスの増設

2018年度春学期にクォーター制に移行後、初級レベルの学生で授業についていけなくなる学生が数名見受けられた。これは、クォーター制になったために週あたりの授業回数および全体の授業回数が減ったことが影響していると思われる。とくに、入門レベル（I-1）についてはゼロから日本語を学ぶため、カリキュラムの初期段階にひらがな・カタカナを覚え、日本語の仕組みを理解して、毎回新しい文型やことばを学ばなくてはならず、非漢字圏の学生にとっては非常に負担が大きい。また、JACsでは現在、2レベル（初級1レベル）以上のクラスでは、総合日本語コース、漢字コース、会話コースの3コースが用意され、4レベル（中級1レベル）以上のクラスでは、総合コース、漢字コース、会話コース、作文コースの4つのコースが開講されているが、入門レベルでは受講できるコースがI-1

と K1+2の2コースしかない。そのため、初学者以外の学生が2～3種類の日本語コースを選択しているのに対し、入門レベルの学生は1コースしか受講できない学生もいる。そのような学生は、週あたり2回(3時間)しか日本語の授業がなく、他の場面で日本語に触れる機会がほとんどない場合は授業についていくことが難しくなっていく可能性があると思われる。このような状況を改善するため、来年度からはS-1クラスの開講を検討している。S-1は、日常生活で日本語を使う場面を増やすことを目標に、I-1で学んだことばや文法を使う練習をするという内容を考えている。

5. 3. プレースメントテストのスケジュールとオリエンテーションのやり方の見直し

秋学期(Q3)はJACsが基幹教育の日本語科目と農学部・工学部の学士課程国際コースと統合してはじめての学期であったため、履修開始までの手続きは手探りの状況で行わなくてはならなかった。今学期の反省は以下の3点である。1) 受講申し込みとプレースメントテストのスケジュールに余裕がなかったため、判定とクラス分けの作業が夜間におよび、関係者の負担が非常に大きくなってしまったこと、2) JACsの全体オリエンテーションについては一部の学生にとっては不要だと思われたこと、3) オリエンテーションと漢字テストが基幹教育の授業開始前に行われたため、日本を離れていて参加できない学生がいたことである。それらの学生には急遽10月1日に漢字プレースメントテストと個別のオリエンテーションの機会を設けるという対応を行った。来年度はこれらの反省点を踏まえ、プレースメントテストのスケジュールに余裕を持たせ、学生の状況を踏まえてスケジュールを調整し、オリエンテーションのやり方を検討したい。

5. 4. 春入学の共創学部生と学部正規留学生のクラスの授業内容の見直し

春入学の共創学部生と学部正規留学生は、プレースメントテストなしで、特定のクラスを受講する。共創学部生は、当初の計画では春学期(Q1)はI-6(Integrated Courses: Intermediate A, B)を受講することになっていた。しかし、学期開始後クラスのレベルが合わなかったため、一つ上のI-7(Integrated Courses: Pre-Advanced)を受講することになった。そして、秋学期(Q3)には当初はI-7(Integrated Courses: Pre-Advanced)を受講する予定であったが、I-8(Integrated Courses: Advanced)を受講した。一方、学部正規留学生は秋学期(Q3)からJACsの受講が始まり、I-7(Integrated Courses: Pre-Advanced)を受講した。これらの学生はプレースメントテストを受験せずに履修するため、学生の日本語レベルにばらつきが大きく、授業内容が学生の日本語レベルやニーズに十分合っていない可能性があった。来年度は今年度の学生や担当教員からの意見、授業評価の結果などを考慮し、より有益な授業が提供できるよう検討していきたい。

参考文献

- 斉藤信浩(2013)「九州大学留学生のための日本語コース(JLC)」『九州大学留学生センター紀要』22, 223-233.
斉藤信浩(2014)「九州大学留学生のための日本語コース(JLC)」『九州大学留学生センター紀要』23, 223-232.
斉藤信浩(2015)「九州大学留学生のための日本語コース(JLC)」『九州大学留学生センター紀要』24, 127-134.
脇坂真彩子(2016)「九州大学留学生のための日本語コース(JACs)」『九州大学留学生センター紀要』25, 131-136.
脇坂真彩子(2017)「九州大学留学生のための日本語コース(JACs)」『九州大学留学生センター紀要』26, 83-88.

付録「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」科目名一覧

留学生センター生	共創学部生・IUPE生・学部所属交換留学生		学部正規留学生
科目名	シラバス上の科目名	略称	シラバス上の科目名
I-1	Integrated Courses : Beginners A	I1A	
	Integrated Courses : Beginners B	I1B	
I-2	Integrated Courses : Elementary 1A	I2A	
	Integrated Courses : Elementary 1B	I2B	
I-3	Integrated Courses : Elementary 2A	I3A	
	Integrated Courses : Elementary 2B	I3B	
I-4	Integrated Courses : Pre-Intermediate A	I4A	
	Integrated Courses : Pre-Intermediate B	I4B	
I-5	Integrated Courses : Intermediate 1A	I5A	
	Integrated Courses : Intermediate 1B	I5B	
I-6	Integrated Courses : Intermediate 2A	I6A	日本語Ⅰ (Q1)
	Integrated Courses : Intermediate 2B	I6B	日本語Ⅱ (Q2)
I-7	Integrated Courses : Pre-Advanced A	I7A	日本語Ⅲ (Q3)
	Integrated Courses : Pre-Advanced B	I7B	日本語Ⅳ (Q4)
I-8	Integrated Courses : Advanced A	I8A	日本語Ⅴ (Q1)
	Integrated Courses : Advanced B	I8B	日本語Ⅵ (Q2)
K-1+2	Kanji Courses : Elementary 1A	K2A	
	Kanji Courses : Elementary 1B	K2B	
K-3	Kanji Courses : Elementary 2A	K3A	
	Kanji Courses : Elementary 2B	K3B	
K-4	Kanji Courses : Pre-Intermediate A	K4A	
	Kanji Courses : Pre-Intermediate B	K4B	
K-5	Kanji Courses : Intermediate 1A	K5A	
	Kanji Courses : Intermediate 1B	K5B	
K-6	Kanji Courses : Intermediate 2A	K6A	
	Kanji Courses : Intermediate 2B	K6B	
K-7	Kanji Courses : Pre-Advanced A	K7A	
	Kanji Courses : Pre-Advanced B	K7B	
K-8	Kanji Courses : Advanced A	K8A	
	Kanji Courses : Advanced B	K8B	
S-2			
S-3	Speaking Courses : Elementary 2A	S3A	
	Speaking Courses : Elementary 2B	S3B	
S-4	Speaking Courses : Pre-Intermediate A	S4A	
	Speaking Courses : Pre-Intermediate B	S4B	
S-5	Speaking Courses : Intermediate 1A	S5A	
	Speaking Courses : Intermediate 1B	S5B	
S-6	Speaking Courses : Intermediate 2A	S6A	
	Speaking Courses : Intermediate 2B	S6B	
S-7	Speaking Courses : Pre-Advanced A	S7A	
	Speaking Courses : Pre-Advanced B	S7B	
S-8	Speaking Courses : Advanced A	S8A	
	Speaking Courses : Advanced B	S8B	
W-5	Writing Courses : Intermediate 1A	W5A	
	Writing Courses : Intermediate 1B	W5B	
W-6	Writing Courses : Intermediate 2A	W6A	
	Writing Courses : Intermediate 2B	W6B	
W-7	Writing Courses : Pre-Advanced A	W7A	
	Writing Courses : Pre-Advanced B	W7B	
W-8	Writing Courses : Advanced A	W8A	日本語Ⅶ (Q1)
	Writing Courses : Advanced B	W8B	

基幹教育の日本語

郭 俊 海*

1. はじめに

基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

基幹教育の「日本語」は言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている。平成30年度の「日本語」の受講者数は1年生が65名、2年生以上が5名である。

2. 平成30年度の学習内容及び履修方法

今年度は、一年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、二年生以上は「基幹教育科目（日本語Ⅴ～Ⅶ）」となっている。「日本語」を細分類すると表1のようになる。

表1 日本語科目一覧

科目名	単位数	授業概要
日本語Ⅰ	1	日本語の総合基礎を学ぶ
日本語Ⅱ	1	日本語の聴解・読解
日本語Ⅲ	1	日本語の作文
日本語Ⅳ	1	日本語の会話・発表
日本語Ⅴ	1	長文などを読んで、要約する技法を学ぶ
日本語Ⅵ	1	専門分野のレポート作成などの技法を学ぶ
日本語Ⅶ	1	学術的な口頭発表などの技法を学ぶ

基幹教育科目では、基本的に第1・第2外国語の選択は、H25年以前と大きく異なり、大半の学部では「日本語」は第2外国語（文科系5単位、理科系4単位）に変わったのである。留学生について

*九州大学留学生センター教授

は、概ね表2のようである。なお、学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数は以下のようになっている。

表2 単位の取り方と卒業必要単位数¹

卒業必要単位数	基本的な単位の取り方		
	1 年前期	1 年後期	2 年前期
2 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修		
4 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	
5 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 1 単位分履修
6 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 2 単位分履修
7 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 3 単位分履修

表3 学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数²

学部		区分	履修言語	1 年次	2 年次以降	修得単位数
共創学部	4 月入学者	第 1 外国語	英語	10	2	12
		第 2 外国語	初修外国語	4	0	4
	10月入学者	第 1 外国語	日本語	8	4	12
		第 2 外国語	英語又は初修外国語 ³	4	0	4
文学部 右の 2 パターンから選択		第 1 外国語	英語	4	3	7
		第 2 外国語	初修外国語	4	1	5
		第 1 外国語	初修外国語	5	2	7
		第 2 外国語	英語	4	1	5
文学部・国際コース		第 1 外国語	英語	10	2	12
		第 2 外国語	初修外国語	4	1	5
教育・法・経済学部		第 1 外国語	英語	4	3	7
		第 2 外国語	初修外国語	4	1	5
理・医・工・芸工・農学部		第 1 外国語	英語	4	4	8
		第 2 外国語	初修外国語	4	0	4
歯・薬学部		第 1 外国語	英語	4	6	10
		第 2 外国語	初修外国語	2	0	2

1 『平成30年度 基幹教育履修要項』112頁より抜粋

2 『平成30年度 基幹教育履修要項』102頁より抜粋

3 第2 外国語は第1 外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修する。

留学生の第1・第2外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の七つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第1・第2外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第1外国語に指定する学部・学科においても英語を第2外国語とし、英語以外の言語を第1外国語にすることができる。また、その場合は、第1外国語と第2外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第1・第2外国語の履修の特例を認める学部は、教育、法、理、医、薬、歯、工、農学部である。文、経済、芸術工学部については、特例のケースは認めていない。

このような複雑な履修方法のため、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門は共同で従来、新入生オリエンテーションで、留学生のみを集めて履修解説を行っている。

本年度の「日本語」の担当教員は、留学生センターの教員2名と芸術工学部の教員1名、非常勤講師1名（基幹教育院卒）である。表4は時間割表と受講者（学部別）である。

表4 時間割表と受講者（学部別）

前期							
1年生対象				2年生対象			
月	2限	日Ⅱ	教・工・農	月	1限	日Ⅴ	工
	3限	日Ⅱ	文・理・工	水	5限	日Ⅵ	文・農・経・理
火	2限	日Ⅱ	経・工・芸工	金	5限	日Ⅶ	工
	3限	日Ⅱ	歯・工				
木	2限	日Ⅰ	教・法・工・農				
	3限	日Ⅰ	文・経・理・医				
金	2限	日Ⅰ	経・医・工				
	3限	日Ⅰ	歯・工				

本年度の講義は、伊都キャンパスと箱崎キャンパスで行われている。1年生においては、前期に総合と聴解、後期に作文と会話・発表が、2年生以上においては、要約、レポート作成、口頭発表が履修できるように、カリキュラムを組んでいる。

後期（1年生対象）							
月	2限	日Ⅲ	教・法・工・農				
	3限	日Ⅲ	文・経・理・医				
火	2限	日Ⅲ	芸工・経・工・理				
	3限	日Ⅲ	工				
木	5限	日Ⅳ	文・理・工・芸工・農				
金	5限	日Ⅳ	経・工・芸工・農・医・理				

3. 基幹教育の「日本語」と留学生センターの日本語科目との統合

基幹教育の「日本語」と留学生センターの日本語科目（JACs）及び国際コースの低年次言語科目としての日本語科目が平成30年10月に統合された。狙いは、共創学部が開設されることに伴う日本語科目の開講コマ数の増加、国際コースのカリキュラム見直し等により日本語教員（常勤，非常勤とも）の負担増等の問題点を解決することと、様々な文化的背景を持つ留学生が同じクラスで学べる協働学習を促進することによって、学習意欲と学習効果の向上を図ることだった。

4. おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。特にレポートや論文などの文章作成や、日本語による口頭発表など応用面において問題がある学生が散見される。また、「日本語」を第2外国語とした場合、大半は2単位或いは4単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がないとかなり難しいため、統合後のカリキュラムでどのように学生の実践的な日本語力の向上を図るべきかが、大きな課題である。

日本語・日本文化研修コース（18期生）報告

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2017-2018)

郭 俊 海*

1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース（JLCC: Japanese Language and Culture Course）は、海外の大学で日本語や日本文化を専攻した学部生を対象とし、今後の日本研究に必要な日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることを目的とした1年間の短期留学コースである。

2. 概要

2. 1. 受け入れ人数

平成12年度から、日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、平成29年度の受け入れ人数は12人である。

2. 2. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の9月30日まで

2. 3. 18期生の国籍と出身大学

18期生は、7カ国・地域の10大学から計12名が参加している。うち、奨学金受給者は、国費が2名（大使館推薦1名、大学推薦1名）、住友商事奨学金が1名、JASSOが9名である。表1は18期生の出身国・地域と出身大学を示す。

2. 4. コースの修了要件

JLCCのコースは、必修科目、選択必修科目そして選択科目から構成される。コースを修了するには、年間30単位（450時間）の履修が必要である。

1）必修科目（2単位 30時間）と選択必修科目（24単位 360時間）

留学生センター開講の「自主研究」、「日本語論（JL: Japanese Language and Linguistics）」、「日本社

*九州大学留学生センター教授

会文化論 (JC: Japanese Culture and Society)」のうち、「自主研究」が2単位、「日本語論」と「日本社会文化論」がそれぞれ年間12単位以上の履修が必要である。詳しくは表2のとおりである。

2) 選択科目 4単位 (60時間)

基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間2科目 (4単位) 以上の履修が必要である。

表1 18期生の出身国 (地域) と出身大学

国・地域	大学名	人数
オランダ	ライデン大学	1
台湾	台湾大学	1
中国	華中科技大学	1
	南開大学	1
	華南理工大学	2
	同済大学	2
ドイツ	ミュンヘン大学	1
フランス	国立東洋言語文化大学 (INALCO)	1
ベトナム	ダナン外国語大学	1
ホンコン	香港中文大学	1
合計 (7カ国・地域・10大学)		(12名)

2. 5. 単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることでもある。

表2 JLCC18期生のカリキュラム

	秋学期 (10月-3月)	曜日 & 担当者	春学期 (4月-9月)	曜日 & 担当者
選択 必修科目	日本語論 (Japanese Language and Linguistics) 通年12単位 (180時間)			
	JL 101 日本語の語彙と語法	金 3 岡崎	JL 201 日本語のスタイルと表現	金 3 岡崎
	JL 102 日本の文学	金 2 斎藤	JL 202 日本語のバリエーション	火 5 斎藤
	JL 103 日本語・日本文化概論 A	水 1 郭	JL 203 日本語・日本文化概論 B	水 1 郭
	JL 104 日本映像文化論 A	木 5 川邊	JL 204 日本映像文化論 B	木 5 川邊
	JL 105 日本語総合力を使おう	金 2 疋田	JL 205 日本語教育学	水 3 小山
	日本社会文化論 (Japanese Culture and Society) 通年12単位 (180時間)			
	JC 102 日本人と和菓子 A	火 3 脇坂	JC 202 日本人と和菓子 B	木 3 脇坂
	JC 103 現代日本の姿	木 2 西頭	JC 203 人と社会を考える	木 2 西頭
	JC 104 ドラマで学ぶ日本の歴史	水 3 小山	JC 204 現代の小説を読む	金 2 疋田
	JC 105 4コマ漫画にみる日本 A	火 3 和田	JC 205 4コマ漫画にみる日本 B	火 3 和田
必修科目	自主研究 (ISP) 2単位 (30時間)			水 3 金 2 郭
選択科目	基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目 通年 4 単位 (60時間) 以上			

2. 6. 第18期生の主な年間行事

日にち	行事内容
9月20日（水）、22日（金）	JLCC 生来日
23日（土）	オリエンテーション
26日（火）～27日（水）	九重オリエンテーション（JTW との共同）、旅行中に三者面談
26日（火）～10月2日（月）	JACs オンライン受講申し込み&プレースメントテスト（OP）
30日（土）	早良区防災センター見学
10月2日（月）	平成29年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式
3日（火）	学部及び基幹教育の授業開始
10日（火）	JLCC 授業開始
17日（火）	JACs Round 3 授業開始
11月5日（土）	東風公民館交流会
26日（日）～27日（月）	JTW・JLCC 長崎見学旅行
12月4日（月）	太宰府戒壇院座禅体験
2018年	
1月9日（火）	基幹教育・JLCC・JACs 授業開始
2月9日（金）	JLCC・基幹教育授業終了
4月6日（金）	大分（日田市）日帰り見学旅行
9日（月）	基幹教育・学部授業開始
10日（火）	JLCC、JACs 授業開始
5月14日（月）	吉野ヶ里遺跡見学
6月4日（月）	歌舞伎鑑賞
25日（月）	玄洋小学校交流
7月17日（火）	インターンシップゲストレクチャー
8月8日（水）	閉講式・パーティー
9日（木）～9月5日（水）	自主研修期間
9月6日（木）	JLCC 成果発表会

2. 7. 自主研究

春学期の必修科目の「自主研究」は、各自が興味のある本（日本に関する内容）を一冊選び読み通し、2週間に一回読書レポートを書く。提出したレポートをもとに口頭報告を行い、そして学期末に最終レポートを提出する。以下は、学生たちのレポートのテーマである（あいうえお順）。

【文献講読】

1. カク チョウソウ 「小津映画の特徴」
2. ヘルビッヒ ユリアン クリストファー 「『霊山と日本人』(宮家 準) 2016」
3. チン チョウアン 「日本妖怪考—百鬼夜行から水木しげるまで」

【社会調査】

4. リュウ サンナン 「日本における外国人の就職の問題点と将来展望—日本人の就活経験を参考に—」
5. リク ワイ 「日本の遠慮文化」
6. グエン ハ ハイ ゴック 「る言葉の標準化」
7. ユー ヒウ イェン トレイシー 「日本人大学生の恋愛観と結婚観」
8. ネイ エツ 「都市における祭りの意義—福岡を中心に—」
9. リ ギョウム 「日本人の決済方法に関する考察—日本人の国民性の観点から—」
10. ヴァン デ クラーウ キラティ 「日本の部活文化」
11. タ ノ 「日本人の類義語の使い分けと使用傾向—外来語と和語・漢語を中心に—」
12. ミオ アレクシ ジャン 「日本人の余暇の過ごし方」

3. 第18期で行った改良

3. 1. 授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種の技能別日本語コース（総合、会話、漢字、作文など）と JLCC の必修科目を中心に受講させ、日本語力を高めることを目的とした。春学期には、引き続き JLCC の必修科目、日本人学生が受講する基幹教育院や学部

の授業を中心に受講させた。

3. 2. 必修科目「自主研究」

研修生の日本語の応用力を高めることと、身を持って日本人や日本社会に接する機会を与えることを目的とし、従来の「文献講読」を15期生から「自主研究 (ISP: Independent Study Project)」とした。そして「自主研究」を「文献講読」と「社会調査」に二分した。文献講読は従来のやり方を踏襲した。

一方、社会調査では、各自が興味のある分野（日本に関する）からテーマを決め、それについて問題設定やフィールド・スタディを行う。その進捗状況について2週間に一回口頭発表による報告をし、学期末にレポートを作成する。研修生たちはインタビュー調査や聞き取り調査といったフィールド・スタディを通じて、日本人や日本社会に接する機会や日本人とのインターアクションが増え、興味のある分野の学習を深めることができただけでなく、日本留学の達成感も味わうことができた。

3. 3. エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC 生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」、「帰国前に日本でインターンシップを経験したい」等の声が上がってきている。こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発を実施し始めた。

18期生のゲストレクチャーは、九州大学留学生センター姜益俊准教授と九州インターンシップ推進協議会参事補佐崔耿美氏によるインターンシップのゲストレクチャーを行っていただいた（2018年7月17日）。

また、新たな試みとして、本学の学務部キャリア・奨学支援課、九州インターンシップ推進協議会の協力のもと、JLCC 生に対してインターンシップ実習の支援を行った。希望者が日本人学生と同様に、本学の学務部キャリア・奨学支援課経由でインターンシップ参加の申込を可能にした。初めての試みにもかかわらず、2名のJLCC 生がインターンシップに参加した（うち、一名が都合により辞退）。

3. 4. その他

学生の指導においては、秋学期の授業の開始前（10月1週目）と秋学期の修了前（1月3週目）に、2回にわたってJLCC 生全員を対象に一人ずつ三者面談（コーディネーターと事務担当）を行った。面談を通じて、学生の来日後及び留学中の適応状況や生活上・勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。

また、JLCC 生が効果的に日本語や日本文化に関する研修を自ら行えるように、平成27年度から、閉講式終了後の翌日から成果発表会の前日までの期間を自主研修期間として設けた。研修前に自主研修計画書、研修後に報告書を提出させることにしている。

4. コースに対する評価

春学期の「自主研究」の最後の授業時に、JLCC 生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点の五つの面から、「非常に満足」「満足」「どちらとも言えない」「あまり満足しない」「満足しない」と5段階評価で評価してもらった（回答者10人）。

1) カリキュラム

カリキュラムの構成、授業内容について、「非常に満足」「満足」と回答した人が10人（100%）だった。カリキュラムの構成や授業内容に満足していることが示されている。

2) 見学旅行

「旅行の場所（内容）」に対しては、「非常に満足」「満足」が8人（80%）だったが、旅行の回数に対して「非常に満足」「満足」と回答した人が5人（50%）に留まっており、以前と同様に旅行回数をもっと増やすべきだということへの期待を滲ませている。

3) 「自主研究」

自主研究の難易度については、「ちょうどよい」が6人(60%)、「難しい」「とても難しい」が4人(40%)だった。日本語能力のバラツキによるものと思われる。全体的に「良かった点」としては、「内容が充実していてよかった。」「初めて自分でアンケート、インタビューをやって研究論文を書いた。難しかったが今後の学習に役立った。」「多くのアドバイスを貰えた。視野を広げられた」との声があった。一方、問題点として「テーマを選ぶ時間が足りない」「時間は少し足りなかった。」「論文の書き方、論理的な書き方をもっと勉強したい」との指摘があった。

5. 今後の課題

前述のとおり、近年日本語・日本文化研修コース生は、ニーズが多様化し、その関心や興味は日本文化や日本社会一般に移りつつあるようである。いかに彼らのニーズに満たしたカリキュラムを継続的に開発・改善をしていくべきかが、重要である。

また、プログラム期間中に、日本での就職やインターンシップそして日本の大学院への進学に関する相談が多々あった。今後、こういった日本語・日本文化研究生を対象とした、就職、大学院進学に関するアドバイスや支援をどう提供すべきかが、引き続き課題となる。

JLCC生の研修期間は9月末までとなっているが、ほとんどの学生が8月中に帰国するという状態が続いている。そのため、受け入れ期間の見直しが行われ、平成30年度以降から受け入れ期間を8月までとした。

日本語研修コース

Intensive Japanese Courses

大 神 智 春*

1. はじめに

日本語研修コースは、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として、来日後の半年間日本語予備教育を行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動、の3点を予備教育として行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と円滑にコミュニケーションができるようにすること」である。以下に平成29年度（2017年度）の実施状況を報告する。

2. 実施概要

平成29年度研修コースの実施時期、主な日程は下記のとおりである。

- 1) 実施期間 前期 4月10日－9月1日（第64期）
後期 10月10日－3月2日（第65期）

2) 主な日程

①前期

開講式	4月7日
授業開始	4月10日
見学旅行（長崎）	5月13日
茶道体験	5月26日
見学旅行（太宰府）	5月30日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	7月3日
発表会	8月3日、4日
閉講式	9月1日

*九州大学留学生センター准教授

②後期

開講式	9月29日
授業開始	10月10日
茶道体験	10月12日
見学旅行（太宰府）	10月28日
見学旅行（小倉城・角島）	11月25日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	2月5日
発表会	2月15日、16日
閉講式	3月2日

3) 受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学および北部九州地区の大学へ配属された研究留学生、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期のみ）、学内募集に応募した九州大学の留学生である。

①前期 18名

全員国費外国人留学生である。前期は初級が12名、中級6名であった。既習者は「Japanese Academic Courses (JACs)」で3種類のクラスを受講した。

出身：アルゼンチン、イラン、インド、インドネシア、ケニア、オマーン、シリア、ジンバブエ、タイ、フィリピン、ブラジル、ベトナム、ベネズエラ、ホンジュラス、マレーシア、メキシコ、ロシア（2名）、

進学先：九州大学16名、九州工業大学2名

②後期 10名

2名が福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生、8名が学内募集に応募した九州大学の留学生である。7名がゼロ初級者、3名が既修者であった。既習者は「Japanese Academic Courses (JACs)」で3種類のクラスを受講した。

出身：アメリカ、エジプト、スウェーデン、中国（5名）、ブルキナファソ、マダガスカル

進学先：九州大学8名、福岡教育大学2名

4) 時間割

① 4月10日～7月14日（第1ラウンド・第2ラウンド）

10月10日～1月26日（第3ラウンド・第4ラウンド）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00		J1		J1	J1
3	13:00-14:30	J1	文化	文化	文化	文化
4	14:50-16:00	J1	S1	K1	S1	K1

② 7月18日～8月4日（夏季ラウンド）

1月29日～2月16日（冬季ラウンド）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	J2	J2	J2	J2	J2
4	14:50-16:00	発表準備	タスク	発表準備	タスク	発表準備

3. 授業内容

1) 授業時間数

前期・後期：全17週間 合計299時間

2) 使用教材

J1	『初級日本語げんき I』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他	The Japan Times
J2	『初級日本語げんき I』『初級日本語げんき II』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック II』	坂野永理他	The Japan Times
K1	『初級日本語げんき I 読み書き編』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
S1	『初級日本語げんき I』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
文化：自習作成教材			

3) 授業内容

初心者レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

- J1：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第1課から第8課がJ1に該当する。
- J2：J1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にJ2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第9課から第15課が学習範囲である。
- S1：J1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。
- K1：ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習（J1クラス）の進捗の後を追う形ですすめる。

文化：①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の3点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

4. 研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。

1) 研修生による評価

①前期 8月4日実施 回答者：18名（初心者12名・既習者6名）

a. 日本語のクラスに関して（初心者12名が回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	8	4	0	0	0	0
S1	9	3	0	0	0	0
K1	10	2	0	0	0	0
文化	8	4	0	0	0	0

- ・とても包括的だった。コースはとてもよかった。特に先生が良かった。
- ・会話クラスはとても良かった。先生のアプローチがとても良い。しかしこのクラスに割り当てられた時間が少ない。学生の日本語をもっとよくするためにもっと会話クラスの時間を増やせばよいと思います。
- ・K1クラスの内容はとてもよかった。宿題とテストは漢字をおぼえるためには重要だった。
- ・文化クラスはとても役に立った。内容は、語彙を増やすこと・会話スキルを高めることにとても役立った。

b. もっと勉強したいこと（初心者12名が回答、複数回答可）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
4	6	4	4	3	2	2	3	2	3	0

c. 授業以外の活動について（全員回答）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1) 長崎旅行	8	5	2	0	0	3
2) 大宰府見学	6	5	4	0	0	3
4) 小学校訪問	6	7	1	0	1	3

- とても素晴らしかったので小学校訪問は早い時期にあったほうがよい。
- 様々な活動があってとても楽しめた
- 原爆資料館の時間が短すぎた

d. 「最終発表会」について（全員回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
6	7	2	0	0	3

- プレゼンは自分の語彙を上達させ会話のスキルを練習する良い機会となった。
- 他の人の国や文化を学ぶことができた。
- 日本語でエッセイを書けるようになるのと日本語でしゃべれるようになることがとても重要だった。

e. コースに対する満足度（全員回答）

90%-100%	9
80% -89%	6
70% -79%	3
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コースへの提案（全員回答）

- コミュニケーションと会話のスキルアップのために会話クラスをもっと増やしたほうがよい。
- 旅行で散策のための自由な時間がもっと欲しかった。文法クラスの最後のパートでもっとチャプターごとにゆっくり進めてほしかった。
- このコースはとても良かったが、すこし速かった。

②後期 2月16日実施 回答者：8名（初心者5名・既習者3名が回答）

a. 日本語のクラスに関して（初心者5名の回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	4	1	0	0	0	0
S1	3	2	0	0	0	0
K1	3	2	0	0	0	0
文化	4	1	0	0	0	0

- ・コミュニケーションを取ることに重点をおいたクラスだったため、会話スキルが向上しただけでなく、たくさんの友人を作ることができた。
- ・会話スキル向上にとってもとても役立った。
- ・K1クラスではちょっとしたゲームをする事が多く、皆が楽しむことができた。
- ・とても興味深い授業だった。今まで日本文化を知るのは映画からだけだったが、このクラスのおかげでもっと日本文化を理解できた。

b. もっと勉強したいこと（複数回答可 初心者5名の回答）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
3	1	3	3	2	3	2	2	2	1	3

c. 授業以外の活動について（全員回答）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1) 小倉・角島旅行	6	1	0	0	0	1
2) 大宰府見学	5	3	0	0	0	0
4) 小学校訪問	7	1	0	0	0	0

- ・エキサイトした経験だった。このアクティビティ授業の前は、めったに旅行に出かけたりすることはなかった。この経験は私の日本での生活に彩りを与えてくれた。
- ・自分にとって新しい経験だった。とても楽しかった。
- ・日本のいろいろな面を見る事ができて楽しかった。

d. 「最終発表会」について（全員回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
7	1	0	0	0	0

- 人前で発表したり質疑応答する機会があり、会話スキルが向上した。
- コミュニケーションスキルを向上させる機会だった。
- この発表会のおかげで皆の前で発表することに自信が持てるようになった。

e. コースに対する満足度（全員回答）

90%-100%	7
80% -89%	0
70% -79%	1
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コースへの提案

- いろいろな話題や練習がミックスされていて良かった。
- 会話力向上のためだけでなく、多くの友人を作れるように、週末にもっとアクティビティの機会を作って欲しい。
- 各レッスンを理解・消化するのに十分な時間があつた。

4. 今後の課題

今後の課題として、2017年度は以下の2点をあげる。

1. 2018年度に Japanese Academic Courses (JACs) がクォーター制になるため当コースも並行してクォーター制に移行することになる。そのため、第1ラウンドから第4ラウンドに加え、夏期・冬期ラウンドを設けてコースを開講するラウンド制は今年度（2017年度）で終了する。クォーター制移行後はJ、K、S、文化の各コースとも開講期間が変わることから学習範囲も変わる。Jコース、文化コースは学習時間数が減少するがSコースとKコースは学習時間が増加するため、今年度までの内容をどのように組み替えていくか慎重に検討し、学習者が今年度までと同様の日本語力を身につけることができるようにしていく必要がある。
2. 2017年度の前期学生の中に、コース修了時の生活環境の変化で精神的に不安定になった学生がいた。

学内のカウンセラーおよび学生が所属する研究室の指導教員と連携を図ることにより学生のケアを行うことができたが、今後も学生ケアの体制を整えていく必要がある。

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

岡 崎 智 己*

1. はじめに

これまで農学部と工学部の学士課程国際コース（以下、IUPE¹と表記）に入学した留学生には、基幹教育・言語文化科目「日本語」として、IUPE 生のみを対象とした日本語コース（3レベル・3クラス構成）で1年半（3学期間）²の日本語教育を行ってきた。しかし、履修規則が改正され、今期の受け入れ（＝2018年秋入学者）からは、留学生センターで提供する日本語コースのうち、Japanese Academic Courses（以下、JACs と表記）を入学時から2年生前期まで受講することで基幹教育・言語文化科目「日本語」を履修したこととみなし、各期「D」以上の成績評価を得た学生には、併せて10単位を付与することとなった³。

2. JACs 受講までのスケジュール

IUPE 新入1年生（農学部6名・工学部13名）と、移行措置としてJACsを受講する農学部IUPE 2年生（9名）⁴に対し、以下の日程でJACsへの受け入れを行った。

9月18日～9月26日	JACs オンライン登録、及びOPT ⁵ 受験
9月26日	JACs ヘルプデスク開設
9月27日	JACs オリエンテーション開催
同日	漢字（筆記）テスト実施
9月28日	JACs 受講コース決定

*九州大学留学生センター教授

1 International Undergraduate Program in English の略

2 1年生前期と1年生後期、及び2年生前期までの計1年半

3 改正された履修規則では1年生の前期・後期でJACsを2コース（IコースとKコース）、2年生の前期で1コース（Iコースのみ）を受講し、卒業に必要な基幹教育・言語文化科目「日本語」10単位を取得するよう定められている。

4 農学部IUPE 2年生は改正前の履修規則に従って卒業に必要な単位取得をしなければならず、もう3単位分の言語文化科目「日本語」の履修が必要となった。

5 Online Placement Tests の略で、インターネット上で「文法」「読解」「聴解」の3種のレベル判定テストを行った。

3. JACs 受講決定コース

各種プレースメントテスト（文法・読解・聴解・漢字）による日本語レベルの判定結果に基づいて一旦受講コースを仮決定し、授業開始後の1週間で学生本人から出された要望と担当教師の判断を経て、最終的な受講コースを決定した。今期は以下のような配置となっている。（2018年10月25日現在）

農学部 IUPE 1 年生（6 名）

学生 1	I3a	K3
学生 2	I1a	K1+2
学生 3	I3a	K3
学生 4	受講免除 (注記参照)	
学生 5		
学生 6		

工学部 IUPE 1 年生（13名）

学生 1	I1a	K1+2
学生 2	I1a	K1+2
学生 3	I1a	K1+2
学生 4	I2a	K3
学生 5	I6	K7
学生 6	I1a	K1+2
学生 7	I1a	K1+2
学生 8	I5a	K5
学生 9	I1a	K1+2
学生10	I2a	K3
学生11	I1a	K1+2
学生12	I5a	K3
学生13	I5a	K5

農学部 IUPE 2 年生（9 名）

学生 1	I7b	K-7
学生 2	I7b	K6
学生 3	I3a	K5
学生 4	I3a	K4
学生 5	I5a	K6
学生 6	I5a	K-6
学生 7	I3a	K4
学生 8	I3a	K4
学生 9	I4a	K4

注記

なお、今期、農学部が受け入れた日本語を母語とする3名の新入生については、農学部、基幹教育院、及び基幹教育課の関係者による協議の結果、以下のような対応をとることとなった。

- 基幹教育・言語文化科目「日本語」10単位についてはJACsに代わり以下の科目を履修させる。
 - ▶ 初修外国語：4単位（春学期からの履修を推奨）
 - ▶ その他、少人数セミナーやディシプリン科目等：6単位
- 成績については言語文化科目「日本語」への読替は行わず、受講した科目のまま認定する。当該学生の卒業判定に際しては、IUPE 教育部会で作成する申し合わせを根拠として、農学部において審議する。
- 申し合せは今期入学者のみの適用とし、次年度以降の入学者に対しては基幹教育科目の履修規則を改正することで対応する。

2018年度日韓共同理工系学部留学生事業に関わる 日本語予備教育について

岡 崎 智 己*

日韓両国政府の合意によって開始された本事業の第2次第9期の実施となる本年度は、本学への進学を希望した7名（男子学生6名・女子学生1名）を対象に下記の日程で日本語コース（JACs）への受け入れを行った。

9月18日～9月26日	JACs オンライン登録、及び OPT ¹ 受験
9月26日	JACs ヘルプデスク開設
9月27日	JACs オリエンテーション開催
同日	漢字テスト・会話テスト実施
9月28日	JACs 受講コース決定

レベル判定のためのプレースメント・テスト（文法・読解・聴解・漢字・会話）の結果に応じ、各学生の JACs 受講コースは以下のように決定された。なお、学部進学後に基幹教育・言語文化科目として「日本語」を選択・受講する場合²に備え、J判定でJ-6以上の日本語力を有すると判断された学生には、予備教育期間中はJコースではなくWコースを受講してもらうこととなった。

	決定コース		
学生1	K-6	S-6	W-6
学生2	K-7	S-8	W-7
学生3	K-7	S-6	W-6
学生4	K-7	S-7	W-7
学生5	K-6	S-5	J-5b
学生6	K-6	S-8	W-6
学生7	K-5	S-5	J-5b

*九州大学留学生センター教授

1 Online Placement Tests の略で、インターネット上で「文法」「読解」「聴解」の3種のレベル判定テストを行った。

2 日韓プログラム生の場合、基幹教育・言語文化科目「日本語」はJACsのJコース（J-6以上）から選択・受講することになっている。

2018年度日本語補講コース (JTCs) 伊都キャンパス報告

A report on Japanese Training Courses (JTCs) Ito campus in the year of 2018

酒 井 彩*

1. はじめに

日本語補講コース Japanese Training Courses (以下、JTCs) は、箱崎キャンパス及び伊都キャンパスにおいて2018年度前期まで開講されてきた。2018年度前期に箱崎キャンパスにある文系学部・学府が伊都キャンパスへと総移転し、留学生センターも2018年8月に伊都キャンパスへ仮移転したことに伴い、箱崎 JTCs は2019年度前期で終了し、伊都 JTCs へと統合された。

JTCs は修士・博士課程所属の留学生を中心に全部局から常時400名前後の受講者が集まり、九州大学最大の日本語コースである。修士・博士課程所属の留学生は、九州大学の留学生の約70%を占め、中には日本語で論文を執筆できる高度な日本語能力を持つ留学生がいる一方、英語で入学を許可され、英語で研究活動を行い、さほど日本語を必要としない留学生もいる。

しかしながら、日本語力の低い留学生も日本社会で生活を営む以上、スーパーで買い物をしたり、レストランで注文をしたりするためには最低限度の日本語が必要である。また、研究室で良好な人間関係を築くためにも日常会話程度の日本語は欠かせない。JTCs はいわばこのような留学生のための一種のセーフティネットとして開講されている。

2. コースの内容

2.1. 開講日程

JTCs は単位の出ない補講コースであり、受講者である留学生は単位取得目的ではなく、日本における円滑な日常生活や研究室等での人間関係の構築や継続のために日本語力を高めたいという思いの下、受講をしている。

JTCs の授業は1コマ90分週2回、10週間にわたり、行われる。他の日本語コースと比べ、短期間のコースであるのは、専門科目の履修登録終了後に、留学生が自ら可能な曜日と時間帯を選択し、研究活動の負担にならないように配慮したためである。

表1に平成30年度(2018年度)のJTCsの開講日程を示す。

*九州大学留学生センター准教授

表1 平成30年度（2018年度）JTCs 開講日程

	前期	後期
受講申し込み・オンラインテスト	4月19日～4月23日	10月17日～10月22日
レベル結果通知	4月24日～4月25日	10月23日～10月24日
クラス選択	4月26日～4月27日	10月25日～10月26日
授業開始～授業終了	5月8日～7月13日	11月1日～1月29日

2.2. 受講申し込み～クラス選択

受講申し込みからクラス選択までの過程は、全てオンライン上で行われる。受講申し込みの2週間前までに各部局に部局宛通知を送り、コースの案内をする。

その後、受講希望の留学生は、受講申し込み期間内に留学生センターのホームページ内「日本語教育」の「詳細 /see more」を参照し、受講を申し込み、オンラインテストを受験する。オンラインテストは日本語未習者＝日本語1を希望する受講希望者のみ免除し、日本語2以上を希望する受講希望者には、文法・読解・聴解の3つのテストを課している。今期は長年使用されてきたテストのうち、文法テストを差し替えた。その成果は別稿に譲る。

オンラインテスト終了後、レベル結果通知が受講希望者にメールで配信される。受講希望者はクラス選択期間内にレベルに合った自分が通える時間帯、曜日のクラスを選択する。

2.3. コース編成と使用教材

クラス数やどのレベルまで設置するかは、学期によって調整を行っている。箱崎キャンパスと伊都キャンパスの2キャンパス体制であった2018年度前期は、受講者数の少なかった日本語8を廃止し、日本語1から日本語7までの7レベルにした。伊都キャンパスのみでの開講を開始した2018年度後期は、秋入学の学生数と箱崎JTCs廃止の影響を勘案し、日本語1から日本語7レベルまでの7レベルにした。

以下の表2と表3はコース編成と各レベルでの使用教材を示している。開講地区の数字は開講クラス数を表している。

表2 平成30年度（2018年度）前期のコース編成と開講クラス数

レベル	レベル名称	教科書	開講地区	
			箱崎	伊都
中級後半 (inter-mediate 2)	日本語7 (Japanese 7)	中級を学ぼう 中級中期	1	－
中級 (inter-mediate 1)	日本語6 (Japanese 6)	中級を学ぼう 中級前期	2	1
中級入門 (pre-intermediate)	日本語5 (Japanese 5)	中級へ行こう	2	1
初級後半 (elementary 3)	日本語4 (Japanese 4)	GENKI II	2	1
初級2 (elementary 2)	日本語3 (Japanese 3)	GENKI II	2	1
初級1 (elementary 1)	日本語2 (Japanese 2)	GENKI I	2	1
入門 (beginners)	日本語1 (Japanese 1)	GENKI I	4	3

表3 平成30年度（2018年度）後期のコース編成と開講クラス数

レベル基準	レベル名称	教科書	開講地区
			伊都
中級後半 (inter-mediate 2)	日本語 7 (Japanese 7)	中級を学ぼう 中級中期	1
中級 (inter-mediate 1)	日本語 6 (Japanese 6)	中級を学ぼう 中級前期	2
中級入門 (pre-intermediate)	日本語 5 (Japanese 5)	中級へ行こう	3
初級後半 (elementary 3)	日本語 4 (Japanese 4)	GENKI II	3
初級 2 (elementary 2)	日本語 3 (Japanese 3)	GENKI II	3
初級 1 (elementary 1)	日本語 2 (Japanese 2)	GENKI I	3
入門 (beginners)	日本語 1 (Japanese 1)	GENKI I	5

3. 受講者

3.1. 受講者数

平成30年度前期・後期のオンラインテストの申請者数と受験者数を表4に示す。前期は申請者234名、受験者205名であり、後期は申請者305名、受験者288名であった。

表4 平成30年度（2018年度）前期・後期のオンラインテスト申請者数と受験者数

	前期			後期	
	申請者	受験者		申請者	受験者
箱崎	128	113		—	—
伊都	106	92		305	288
計	234	205		305	288

図1に平成29年度（2017年度）前期から平成30年度（2018年度）後期のオンラインテスト申請者数と受験者数の推移を示す。いずれのキャンパスの場合も後期入学者が多く、それに伴い、申請者、受験者も多くなっている。箱崎キャンパスの申請者数と受験者数は伊都キャンパスへの段階的移転に伴い、いずれも徐々に減少している。一方、伊都キャンパスは2017年度前期と完全移転後の2018年度前期を比較した場合、増加傾向にある。



図1 平成29年度（2017年度）～平成30年度（2018年度）の申請者数と受験者数の推移

次に、レベル別受講者数を表5に示す。2018年度前期と後期を比較すると、入門～初級レベル（日本語1～3）の受講者数の増加が顕著である。

表5 平成30年度（2018年度）前期・後期のレベル別の受講者数

	前期				後期	
	箱崎		伊都		伊都	
	受講者	クラス	受講者	クラス	受講者	クラス
日本語1	28	4	28	3	84	5
日本語2	16	2	11	1	30	3
日本語3	13	2	19	1	37	3
日本語4	24	2	19	1	51	3
日本語5	17	2	6	1	28	3
日本語6	9	2	9	1	17	2
日本語7	6	1			7	1

3.2. 所属・身分別のオンラインテスト申請者の内訳

所属・身分別のオンラインテスト申請者の所属と身分を表6、表7、表8に示す。これまで箱崎JTCsで学んでいた歯学部・歯学府、法学部・法学府、人間環境学府、経済学部・経済学府の留学生在が2018年度後期からは伊都キャンパスで学ぶようになったことがわかる。

表6 箱崎キャンパス 所属・身分別のオンラインテスト申請者数内訳（2018年度前期）

	修士	博士	研究生	特別聴講・ 研究学生	計
生物資源環境科学府	17	12	2		31
医学部・医学系学府	1		1		2
歯学部・歯学府		1			1
芸術工学部・芸術工学府		1			1
経済学部・経済学府	19	2	4	3	28
人間環境学府	5	1	13	3	22
法学部・法学府	22		1	9	32
文学部・人文科学府	1			1	2
地球社会統合科学府			1		1
農学府			3		3
システム生命科学府		2			2
薬学部・薬学府	3				3
計	68	19	25	16	128

表7 伊都キャンパス 所属・身分別のオンラインテスト申請者数内訳（2018年度前期）

	修士	博士	研究生	特別聴講・ 研究学生	計
生物資源環境科学府	4	4			8
総合理工学府		1			1
文学部・人文科学府			1		1
地球社会統合科学府	5	3	1	1	10
農学府			2		2
理学部・理学府	3	2	2		7
統合新領域学府			1		1
数理学府			1		1
システム情報科学府	2	8	8	1	19
システム生命科学府		5	2	1	8
工学部・工学府	11	21	10	6	48
計	25	44	28	9	106

表8 伊都キャンパス 所属・身分別のオンラインテスト申請者数内訳（2018年度後期）

	修士	博士	研究生	特別聴講・ 研究学生	学部	計
生物資源環境科学府	19	15	2	1		37
総合理工学府		1				1
文学部・人文科学府	2		4	6		12
地球社会統合科学府	5		4	2		11
農学府			10	3		13
理学部・理学府	7	3				10
統合新領域学府	2	1	2			5
数理学府	1		2	1		4
システム情報科学府	1	6	19	5		31
システム生命科学府		3	7			10
工学部・工学府	18	30	34	4	1	87
歯学部・歯学府			2			2
法学部・法学府	27	1	1	5		34
人間環境学府	3	2	20	1		26
経済学部・経済学府	15		4	3		22
計	100	62	111	31	1	305

4. 今期及び来期の改善事項

4.1. 移転

2019年度前期に箱崎キャンパスにある文系学部が伊都キャンパスへと総移転し、留学生センターも2019年8月に伊都キャンパスイーストゾーンに仮移転した。これに伴い、箱崎JTCsは廃止し、伊都JTCsに統合された。

そのため、2018年度後期は400名近い申請者と350名近い受験者が予想されたが、実際の申請者は305名、受験者は288名に留まっている。これにはJTCsの開講母体である留学生センターが伊都キャンパスイーストゾーンに仮移転の状態にあり、キャンパス内の中心ではなく、最東に位置していること、受講者である留学生自身も伊都キャンパスに不慣れであることが影響をしていると考えられる。

2019年春には留学生センターが伊都キャンパス内の中心であるセンターゾーンに完全移転することで、申請者は400名近くに上ると予測している。完全移転後には同キャンパス内とはいえ、キャンパスが広大で限られた休み時間の移動などで受講を諦めていた留学生も受講できるようになるため、現在以上の受講者数の増大が予測される。

また、センターゾーンへの留学生センター移転に伴い、教室の整備、センターの場所の周知など今期同様の課題が生じることが考えられ、事前の準備が必要である。

4.2. 各レベルの到達目標の明確化

今期はこれまで課題とされていた各レベルの到達目標の明確化に着手した。下記に示すレベル別の到達目標をコーディネーターから提示した。今期はこの目標に従い授業を行い、授業担当の非常勤講師と学期終了後にすり合わせ、留学生センターのJTCsのホームページに掲載することで、受講者に予め各レベルの差異を提示するとともに、オンラインテストでプレースされた留学生が学期開始後に上または下へのレベル移動を希望した際の指針とする予定である。

JTCsでは漢字の勉強はしていません。自分自身で学習してください。

日本語1 (Japanese 1)

このコースは日本語学習経験のない学習者を対象に、1回90分の授業を週2回行う。『げんきⅠ』を用いて、第1課～第5課までの簡単な日常会話や自己紹介に必要な基本的な語彙、表現や文法を学ぶ。また、ひらがなとカタカナの読み書きを学ぶ。

このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

聞く：相手がゆっくり、はっきりと話す場合、身近な話題に関する基本的な表現が聞き取れるようになる。

話す：簡単な挨拶や自己紹介、自分に関わる身近な話題について簡単な語句や文で表現できるようになる。

読む：ひらがな、カタカナが読めるようになる。

書く：ひらがな、カタカナで短文が書けるようになる。

文法：初歩的な文法が使えるようになる。

たとえば、自己紹介をする（私はアメリカ人です）、買い物をする（これはいくらですか）、場所を尋ねる（郵便局はどこですか）、遊びに誘う（いっしょに映画を見ませんか）、自分の日常について言う（8時に起きます）、感想を言う（魚が嫌いです）など。

テキスト：『げんき I 第2版』（ジャパントタイムズ）第1課～第5課

『げんき I ワークブック 第2版』（ジャパントタイムズ）

日本語2 (Japanese 2)

このコースは『げんき I』の第1課～第5課レベルの基礎的な日本語を習得し、ひらがな、カタカナが書ける学生を対象に、1回90分の授業を週2回行う。『げんき I』を用いて、第11課までの日本語力を伸ばすために基本的な語彙、表現や文法、日常的な話題に関する日本語を学ぶ。

このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

聞く：自分に関わりのある日常的な話題などについて、よく使われる語彙や表現が理解できるようになる。

話す：日常的な話題や出来事、今後の予定などについて一連の語句や文を使って簡単に説明できるようになる。

読む：ひらがな、カタカナ及び簡単な漢字で書かれた文が読めるようになる。

書く：ひらがな、カタカナで一連の文が書けるようになる。

文法：初級前半レベルの文法が使えるようになる。

たとえば、お願いをする（窓を開けてください）、許可を得る（教科書を見てもいいですか）、理由を言う（明日テストがありますから）、人について描写する（山田さんは髪が長いです）、友達言葉を使う（明日大学に行く？）、考えを言う（この町はとてもきれいだと思います）、伝言する（ロバートさんは病気だったと言っていました）、比べる（秋より夏の方が好きです）、予定を言う（月曜日に映画館に行くつもりです）、希望を言う（中国に行きたいです）、経験を言う（富士山に登ったことがあります）など。

テキスト：『げんき I 第2版』（ジャパントタイムズ）第6課～第11課

『げんき I ワークブック 第2版』（ジャパントタイムズ）

日本語3 (Japanese 3)

このコースは初級前半『げんき I』終了程度の学生を対象に、1回90分の授業を週2回行う。『げんき II』を用いて、第17課までの初級後半のやや難しい語彙、表現や文法、自分の経験や活動に関する日本語、場面に合った話し方を学ぶ。

このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

聞く：自分があまり知らない話題についても語彙や表現を理解でき、要点が聞き取れるようになる。

話す：自分の経験や活動について、場面に合った話し方でやり取りできるようになる。

読む：自分があまり知らない話題に関する一連の文がおおよそ理解できるようになる。

書く：ひらがな、カタカナと自分で学んだ限られた数の漢字を使って、一連の文が書けるようになる。

文法：初級後半レベルの文法が使えるようになる。

たとえば、理由を言う（バスが来なかったんです）、助言する（もっと野菜を食べたほうがいいです）、予測する（雨が降るでしょう）、できることについて言う（漢字が読めます）、印象を言う（このケーキはおいしいそうです）、希望を言う（辞書がほしいです）、推測する（テストは難しいかもしれません）、授受について言う（子供におもちゃをあげました）、予定について言う（日本の会社で働こうと思います）、場面に合った話し方をする（手伝っていただけませんか）、伝言する（昨日は会社に行かなかったそうです）、順序を言う（国に帰る前に、東京に行きます）など。

テキスト：『げんき II 第2版』（ジャパントタイムズ）第12課～第16課（12課は『げんき I 第2版』に含まれる）

日本語 4 (Japanese 4)

このコースは『げんきⅡ』第1課～第16課終了程度の学生を対象に、1回90分の授業を週2回行う。『げんきⅡ』を用いて、初級後半の語彙、表現、文法、様々な話題に対応できる日本語を学ぶ。

このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

聞く：自分自身に馴染みのない話題でも情報が正しく聞き取れ、敬語も理解できるようになる。

話す：自分自身に馴染みのない話題でも様々な話題に関して、意見を述べ、必要に応じて敬語を使うことができるようになる。

読む：様々な話題について書かれた文を読んで要点が理解できるようになる。

書く：ひらがな、カタカナと限られた漢字を使って、様々な話題についてのまとまりのある短い作文が書けるようになる。

文法：日本語3を踏まえた初級後半レベルの文法が使えるようになる。

たとえば、失敗について言う（かばんを忘れてしまいました）、後悔したことを言う（もっと勉強すればよかったです）、尊敬語を使う（何を召し上がりますか）、謙譲語を使う（来年も日本におります）、お礼を言う（手伝ってくれてありがとうございます）、被害状況について言う（足を踏まれました）、準備状況について言う（予約がしてあります）

テキスト：『げんきⅡ 第2版』（ジャパントイムズ）第18課～第22課、23課「ても」

日本語 5 (Japanese 5)

このコースは概ね300時間程度の初級レベルの日本語を学んだ学生を対象とする。1回90分の授業を週2回行う。このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

- 1) 初級で学んだ日常的な語彙について正しく使用できるようになる。
- 2) 日常的な話題について具体的に書かれた文章を読み、理解できるようになる。
- 3) 日本の文化、社会、生活に関する情報を理解、自分の感想が言えるようになる。
- 4) 簡単な文を使って、学生同士でお互いの考えを述べ合うことができるようになる。
- 5) 表記に注意し、感想文や説明文など、まとまりのある文章を書けるようになる。
- 6) やや自然に近いスピードの会話を聞いて、概ね大意が把握できるようになる。

テキスト：『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）

日本語 6 (Japanese 6)

このコースは概ね300時間程度の初級レベルと50時間程度の中級レベルの日本語を学んだ学生を対象とする。1回90分の授業を週に2回行う。このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

- 1) 日常的な語彙だけではなく、抽象的なや難しい語彙についても理解できるようになる。
- 2) 日本社会や一般常識的な内容に関する文章を読み、展開や話の流れが読み取れるようになる。
- 3) 日本社会や一般常識的な内容に関して事実を述べ、自分の意見や感想をまとめることができるようになる。
- 4) 学生同士でお互いの考えや意見を述べ合い、それに関して文章を書くことができるようになる。
- 5) 自然に近いスピードでまとまりのある会話を聞いて話の流れを理解することができるようになる。

テキスト：『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）

日本語 7（Japanese 7）

このコースは概ね300時間程度の初級レベルを十分に理解し、中級前半レベルの日本語を学んだ学生を対象とする。1回90分の授業を週に2回行う。このコースでは、下記の技能を習得することを目標とする。

- 1) 漢語や抽象的な語彙について文脈の中で正しく使用できるようになる。
- 2) 幅広い内容について書かれた文章を読み、展開を読み取り、大意を正しく読み取れるようになる。
- 3) 幅広く社会的、文化的な知識を増やし、自分の意見を的確に表現できるようになる。
- 4) 自然に近いスピードの会話も概ね理解できるようになる
- 5) 習得した文法を用い、書き言葉話し言葉の違いに注目して文章が書けるようになる。

テキスト：『中級を学ぼう（中級中期）』（スリーエーネットワーク）

来期以降の各レベルの到達目標の明確化の完成は、文法・読解・聴解の3つのオンラインテストの差し替えの完了とともに、受講者へのレベル説明や授業の目的、方針を定める際にも役立つと思われる。

参考文献

斉藤信浩・酒井彩（2017）「補講コース日本語（JTCs）」『九州大学留学生センター紀要』第26号，pp.97-102.

官民協働海外留学支援制度 「トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム」

生 田 博 子*

1. 「トビタテ!留学 JAPAN」日本代表プログラムとは?

1-1 概要:

官民協働海外留学支援制度～トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム～(以下、トビタテ)は、文部科学省企画・運営による、民間企業からの支援を活用した留学促進のためのプログラムである。日本国籍もしくは永住権を有し国内の高等教育機関に在籍し、産業界を中心に社会全体に貢献・還元する意欲のある学生の留学を主な支援対象とする。2014年度から開始され、年2回500名ずつの募集で1000名、2018年度より400名ずつの募集で800名の留学支援を計画している。2018年12月現在、第10期が二次審査選考中、第11期の募集が行われている。

1-2 目的:

過去約10年間における日本人海外留学生数の継続的な減少をうけて、今後海外留学経験者数を倍増させる為の取り組みの一環として企画された。「日本再興戦略～JAPAN is BACK」(2013年6月14日閣議決定)で掲げられた目標である、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに、大学生の海外留学12万人(現状6万人)、高校生の海外留学6万人(現状3万人)への倍増をトビタテの公式目標としている。トビタテの支援による海外留学を経験した学生は、将来的な社会貢献の一環として、支援企業と共にグローバル人材コミュニティを形成し「産業界を中心に社会で求められる人材」または「世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材」へと育成される。また、帰国後は海外体験の魅力を伝える活動を通して、日本全体の留学機運を高めることに貢献することが期待されている。

1-3 特徴:

以下の4つのコースが設けられている:

- 1) 「理系・複合・融合系人材コース」(対象:理系分野で留学する学生)
- 2) 「新興国コース」(対象:新興国へ留学する学生)
- 3) 「世界トップレベル大学等コース」(対象:世界トップランキング上位大学に留学する学生)
- 4) 「多様性人材コース」(対象:スポーツ、芸術、政治など様々な分野において留学する学生)

*九州大学留学生センター准教授

- この他、地方の高等教育機関と民間企業の連携により海外留学希望学生を募る「地域人材コース」が設けられている。
- 支援期間は最短28日から最長2年間の海外留学。
- 海外の大学等で講義受講などの学修活動をするのみならず、インターンシップやボランティア活動などの実践的な活動を盛り込んだ留学計画を募集している。
- 平成30年9月19日現在、多様な分野でグローバル・ビジネスを展開する企業231社が116.8億円の資金を提供している。
- 選考は書面審査（一次選考）と面接審査（二次選考・最終選考）の2段階から成る。
- 第8期より、「理系、複合・融合系人材コース」の中に、支援人数を20%程度とする「未来テクノロジー人材枠」が設置された。日本の未来を切り開く以下の6つのテクノロジー分野に対して強い興味と高いポテンシャルを持ち、将来当該分野で日本をリードしていく意思を持った人材を育てることを目的としている。

2. 九州大学の実績と支援体制

最終審査結果が出ている第9期までに、本学からの応募者数は284名、一次審査合格213名、最終審査合格134名（合格率47%）で、全国第6位の合格実績を誇る。現在2次審査中の第10期は、45名が応募、31名が一次審査に合格した。1期から10期までの部局別申請者数を見ると、工学部からの応募者が62名と最も多く、芸術工学研究院の57名、学部生のための21世紀プログラム30名と続く（資料1）。

九州大学の国際戦略の一つとして、海外留学派遣人数を増やすというのがあり、その中でもトビタテは、総長を始め執行部も大変注目し、留学生センター教員1名、留学生課職員8名の9人体制で全学トビタテ支援をしている。応募者数そのものの伸び悩みを改善するため、7期までは全学スタッフのみが学生への周知やサポートに努めていたが、8期より、留学者数・トビタテ応募者数そのものを増やすために、全学チームが部局と積極的に連携し、教員への周知・教育をしながら学生支援を行うという戦略を展開している。

資料 1

トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム 協働型の申請者数～合格者数～留学費額 (第1期～第9期)

【備考】
原則として留学時の所属により作成

H30.3.1現在

(単位:人)	累計										H29年度申請										H28年度申請									
	6期 (H30.8.11～H31.3.31出券)					8期 (H30.4.1～H30.10.31出券)					7期 (H29.8.18～H30.3.31出券)					6期 (H29.4.1～H29.10.31出券)					5期 (H28.4.1～H28.10.31出券)					4期 (H27.4.1～H27.10.31出券)				
	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者	申請者	うち 1次 合格者	うち 2次 合格者	うち 3次 合格者	うち 4次 合格者
文学部	14	10	1	4	0	3	1	1			1	0				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
法学部	9	6	2	4	0	4					1	0				3	3	1			1									
経済学部	18	11	0	5	0	2	3	1	1		5	2				2					1									
理学部	21	16	1	3	2	4	1	1			3	2				1					3									
医学部	6	6	0	3	0	2					2	2				1														
歯学部	7	6	1	5	2	3					1	1				1					1									
薬学部	1	1	0	1	0	1																								
工学部	1	0	0	0	0	1	0																							
芸術工学部	32	26	5	15	1	12	1	0			7	6	3	2		3	3	3	3	1	3	6	5	1	3	1	2			
農学部	25	22	2	15	0	13	3	2			2	2				1					3	3	1	1	2	2				
農学部	9	9	3	3	0	2	1	1			2	2				1					1	1	1	1	1	1				
21世紀プログラム	29	22	0	16	1	15					2	1				0					3	2	1	1	3	2	2			
小計	172	135	15	79	6	61	11	6	0	4	0	0	28	18	3	9	1	0	15	13	3	6	0	6	24	20	4	15	3	12
人文科学部	0	0	0	0	0	0																								
地球社会科学研究科(人文)	8	3	0	2	0	2	1	0																						
人間環境学部	7	5	0	4	0	2					2	2																		
法学部	3	2	0	2	0	2															1	0								
経済学部	1	1	0	1	1	0																								
理学部	3	1	0	1	0	1	1	0																						
数理学部	0	0	0	0	0	0																								
システム生命科学部	6	4	0	3	0	3																								
医学系学部	4	3	0	2	0	2															1	1								
工学部	0	0	0	0	0	0																								
農学部	1	1	0	1	0	1																								
工学部	20	13	2	9	0	7	1	0			5	3	2			1	1	1												
芸術工学部	20	15	0	9	0	4	5	4			2																			
システム情報科学部	4	4	0	2	0	2	1	1			6	4	3																	
総合理工学部	18	13	1	7	0	7	2	0			3	1	1			3	3	2												
生物資源環境科学部	14	11	1	10	2	7	1	1			1																			
総合新領域科学部	2	1	0	1	0	1																								
その他(他大学への進学)	1	1	0	1	0	0					1	1	1																	
小計	112	78	4	55	3	41	12	6	1	2	0	0	20	13	1	9	0	0	6	5	1	3	0	3	14	14	1	13	0	13
合計	284	213	19	134	9	102	23	12	1	6	0	0	48	31	4	18	1	0	21	18	4	9	0	9	38	34	5	28	3	25

(単位:人)			H27年度申請										H26年度申請										H25年度申請									
			5期 (H28.8.19～H29.3.31出発)					4期 (H28.4.1～H28.10.31出発)					3期 (H27.8.21～H28.3.31出発)					2期 (H27.4.1～H27.10.31出発)					1期 (H26.8.21～H27.3.31出発)									
部局名	申請者	うち 合格者	うち 併進者	2次 合格者	うち 併進者	留学者	申請者	うち 合格者	うち 併進者	2次 合格者	うち 併進者	留学者	申請者	うち 合格者	うち 併進者	2次 合格者	うち 併進者	留学者	申請者	うち 合格者	うち 併進者	2次 合格者	うち 併進者	留学者	申請者	うち 合格者	うち 併進者	2次 合格者	うち 併進者	留学者		
学部	文学部	1	0			3	3	0			3	2	0			1	1		1													
	教育学部	1	1	1		1	3	2	1		1	2	1			1			1													
	法学部					2	2			1	1	1	0			2	2		2													
	経済学部	4	3	1	1	1	2	2	0		4	4	3	1	2	1	1	0		3	1			0								
	理学部	1	1	1		1	2	2			1	1	0																			
	医学部					1	1			1																						
	歯学部					1	1			1																						
	薬学部																															
	工学部					6	6		4		4	5	1	3	3	1	1	0		3	0											
	芸術工学部	8	7		6		1	1		1	1	1	1	1	1	2	2	1		1	3	2		1								
大学院	農学部	1	1	1		2	2		2	2	1	1	0																			
	21世紀プログラム	2	2		2	4	4		3	1	2	2	2	2	6	6	3		3	7	3		3									
小計			18	15	2	11	0	11	27	26	1	15	1	14	20	18	1	10	1	9	13	13	1	5	0	5	18	6	0	4	0	
人文学部																																
地球社会統合科学部(人文)																																
人間環境学部																																
法学部																																
経済学部																																
理学部																																
薬学部																																
システム生命科学部																																
医学系学部																																
歯学部																																
工学部																																
芸術工学部																																
システム情報科学部																																
総合理工学部																																
生物資源環境科学部																																
総合新聞科学部																																
その他(他大学への進学)																																
小計			11	9	0	6	1	5	11	9	0	6	1	5	13	12	0	9	0	9	7	7	0	6	1	5	18	3	0	1	0	
合計			29	24	2	17	1	16	38	35	1	21	2	19	33	30	1	19	1	18	20	20	1	11	1	10	38	9	0	5	0	

平成30年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

生 田 博 子*

1. はじめに

スーパーグローバル大学創成支援事業とは、国の政策として高等教育の国際競争力を向上させ、グローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速することを目標として、大学内の体制強化や国際化を進める大学を重点的に支援する制度である。トップ型大学13校（世界大学ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象）とグローバル化牽引型大学24校（これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象）が選拔され、本学はトップ型に選ばれた。本章では本学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として開講されている「学部生・大学院生共通基幹教育科目・世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」について報告する。

2. 「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

2.1. 目的

「世界が仕事場」は、九州大学留学生センターにおけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、グローバル人材とは何かを探求する日本人学生を対象に開講された授業である。一般に大学が提供する留学支援は、語学の授業、留学プログラムや奨学金制度の充実、留学カウンセリングなどが挙げられるが、学生の海外留学や海外でのキャリアへの興味を引き出し、涵養することを目的にしたカリキュラムの例は少ない。近年、日本人学生の海外留学の減少が懸念されており、留学目的や意識・意欲の変化などの理由が挙げられている。九州大学も例外でなく、スーパーグローバル大学調書では日本人留学生派遣促進に関する取り組みを提唱するも、留学希望者が増えないことへの懸念から、学生の自主性、広報活動だけに頼らず新たな取り組みが求められていた。本コースは、そのような状況を打開すべく、基幹科目として全学の学部生、大学院生、留学生を対象に企画したものである。

3年目を迎えるこの授業では、単に短期留学や海外での研究経験があるというだけでなく、海外の大学や大学院で学位を取得し、世界の第一線で活躍している日本人（国連職員、研究者、NPO代表、起業家、ジャーナリストなど）が、それぞれの仕事や生き様を語り、異文化や海外体験を含む、幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得ることを目的としている。学生たちには、海外で活躍する人々も、色々な事に悩み、失敗を重ね、試行錯誤しながら、国際社会の中

*九州大学留学生センター准教授

でキャリアを築き人生を歩んできたということを知り、生き方の多様性を学ぶことを期待している。

2.2. 実践

本コースは①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッションと発表、が3本の柱となっている。秋学期と冬学期に開講し、全16回の講義はオリエンテーション1回、外部招聘講師8名と本学教員3名による講義11回、グループディスカッション5回から構成される。受講生は、毎回の授業で、講義に関する短いレポートの提出、ディスカッションへの積極的な参加、学期末のレポートの提出が求められている。今年度の秋学期の履修者数は、全部局より学部生が156名、大学院生が13名、非正課生（留学生）が4名の173名で、昨年度の93名より大幅に増えた。また聴講生が多く、本学教職員も積極的に聴講している。

2.3. 成果

本学の大学間交換留学申請者の多くは、本授業の受講生であり、学生や教職員から地球市民、グローバル人材を考える上で、大変有意義な講義であるとのフィードバックを頂いている。学外からの参加や見学などの依頼等も多い。

3. まとめ

本授業は、九州大学に在籍する日本人学生や留学生に、国際社会の現代における人生の選択肢、個々がグローバル人材として要素の探求などを狙いとしている。グローバル人材の育成や大学のグローバル化の達成にはさまざまなアプローチがあるが、学生の意識を変えていくことも大学の国際化に大きく貢献する。

Summer in Japan (SIJ) 2018 および Summer Program for EJEP 開催報告

木 下 博 子*

斉 藤 信 浩*

1. はじめに

Summer in Japan (以下 SIJ) は本学が16年間に渡り実施してきたサマーコースである Asia in Today's World の後継プログラムとして2017年に開始し、今年度2年目を迎えた。また、Summer Program for EJEP は、日本・エジプト両政府間で締結されたエジプト日本教育パートナーシップ (Egypt Japan Education Partnership、以下 EJEP) による初めてのエジプト人留学生の受け入れであり SIJ と共同で開講した。本報告では、2年目を迎えた SIJ と、初めての開催となった Summer Program for EJEP に参加した留学生から得られたアンケート調査回答に基づき、今年度のプログラムに対する評価を分析し、今後の展望について考察する。

2. SIJ および Summer Program for EJEP 概要

2. 1. SIJ 概要

2018年の SIJ は6月25日 (月) から7月20日 (金) までの4週間、伊都キャンパスで開講した。前半2週間は伊都キャンパス学生寄宿舎に滞在し、後半2週間は福岡市、糸島市の一般家庭でのホームステイを実施した。また、今年度もチューター制度を採用し、参加者1名につき、本学学生1名をマッチングし、キャンパス内および学生生活のサポートを依頼した。

SIJ では現代日本研究入門 (Introduction to Contemporary Japan、以下 ICJ) コース (2単位) と日本語 (Japanese Language) コース (1単位) を開講し、両コースとも所定の修了条件を満たした場合のみプログラム修了とみなした。

2. 2. Summer Program for EJEP 概要

Summer Program for EJEP は、2018年が初めての開催であった。EJEP は今後2021年までの間に約2,500名のエジプト人留学生 (研修生を含む) を日本へ派遣する事業であり、修士や博士の学位取得を目的とした研究留学に加えて、1ヶ月や6ヶ月、1年以内などの短期派遣プログラムも含む包括的な

*九州大学留学生センター准教授

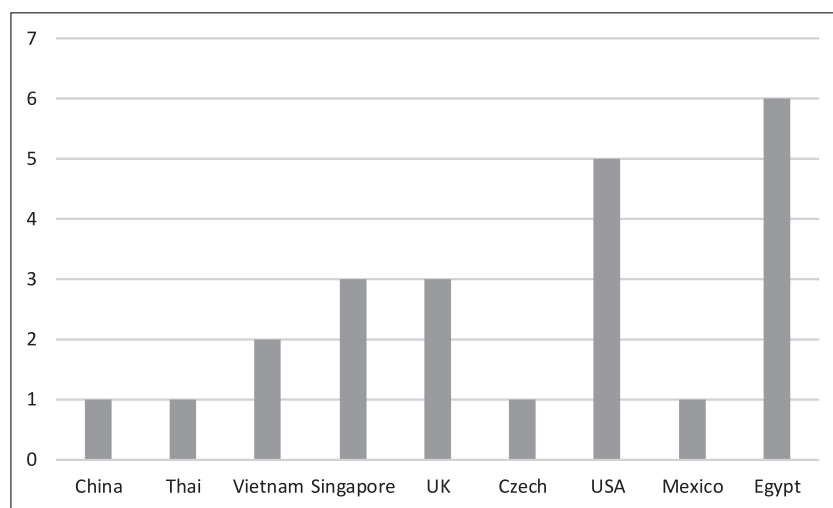
パートナーシップである。今夏 Summer Program for EJEP に受け入れたエジプト人留学生は、EJEP の短期派遣スキームに該当する。2018年は、エジプト政府より32名が選拔され¹、そのうち6名を本学が受け入れた。一機関としての受け入れ数では本学が最大である²。Summer Program for EJEPは本学の人的資源に限りがあることから SIJ と共同での開催とし、参加者は全員 SIJ と同一の講義を受講した。

2. 3. SIJ および EJEP 参加者

SIJ の公募開始後、本学の協定校（大学間、および部局間を含む）および北京オフィス、台湾オフィス、ハノイオフィスを通じてポスターを電子媒体で送付し、広報活動を実施した。その結果募集期間（2018年1月中旬～2月末日）の間に36件の応募があった。所属大学における成績証明書（GPA スコア）、英語能力を証明するスコア（TOEFL iBT あるいはそれに準ずる英語能力検定試験のスコア）、および小論文を総合的に審査し、23名を合格とした。その後、不測の事態や、やむを得ない事情³により6名が辞退し、最終的な参加者は17名であった。

Summer Program for EJEP 参加者の選考方法については、エジプト政府による審査（書類審査、面接試験）を通過した者が推薦されたため、推薦された6名全員を受け入れることとした⁴。

以下の図表は、SIJ と Summer Course for EJEP の参加者23名の出身国および年齢分布である。



出所：筆者作成

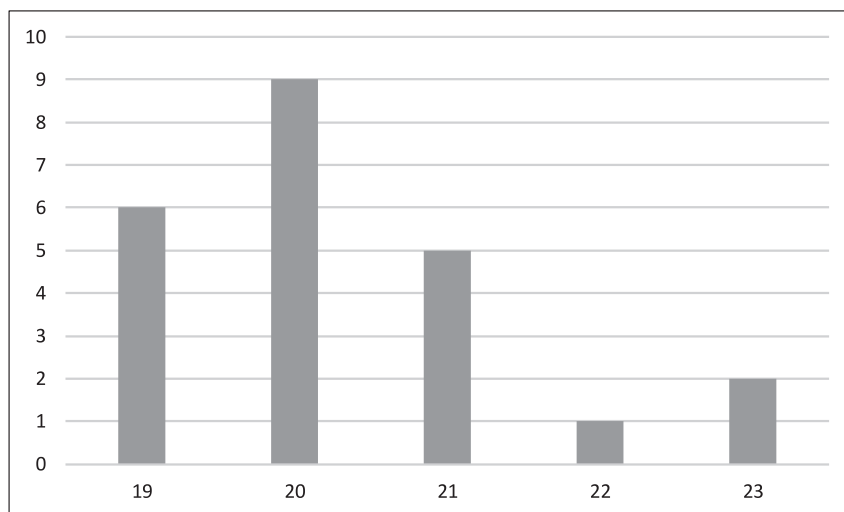
【図表1：プログラム参加者の出身国】 単位（人）

1 在日本エジプト大使館文化・教育・科学局提供の資料による。

2 当初は8名を予定していたが、2名が派遣を辞退した。

3 所属大学の定期試験日と重なる、家庭の都合など。

4 およその学力を把握するために、別途、SIJ と同様に成績証明書（GPA スコア）、英語能力を証明するスコア、小論文を提出してもらった。



出所：筆者作成

【図表2：プログラム参加者の年齢分布】 単位（人）

SIJ 参加者の内訳は東南アジアおよび東アジアから7名、ヨーロッパから4名、そして北米およびラテンアメリカ地域より6名であり、男女比は男性9名、女性7名であった。EJEPの参加者6名はすべて男性である。全体では男性16名、女性7名と男性の方が多数であったが、ジェンダーバランスの差による問題は特段生じなかった。

参加者の年齢は、19歳から21歳までで20名を占めていることから、日本の大学の1年生から3年生に該当する参加者が9割であった。

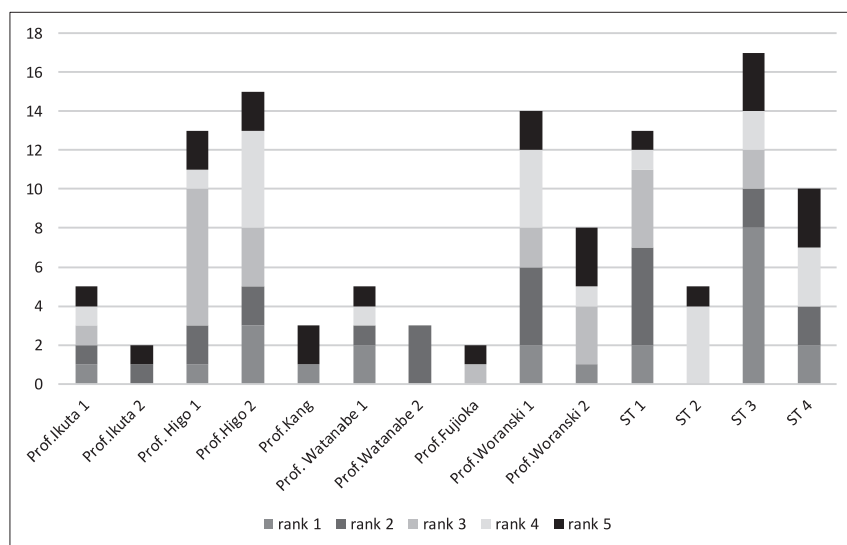
3. 現代日本研究入門 (ICJ) コース

今夏、ICJでは留学生センターおよび他の部局教員によるオムニバス形式のリレー講義を12コマ、スタディートリップを4回、各スタディートリップ後の教場レポートおよびディスカッションを3コマ、そして最終グループプレゼンテーションを実施した。出講教員、講義タイトルおよびスタディートリップの内容は以下の通りである。

Lecturer	Title
Prof. Ikuta (1)	Values and Spirituality in Japan
Prof. Ikuta (2)	Sustainable Development in Japan and the Arctic
Prof. Higo (1)	Your Age Matters: Japan as a Seniority Society
Prof. Higo (2)	Population Aging: Japan as a Hyper-Aged Society
Prof. Kang	Current Environmental Problem in Japan

Prof. Watanabe (1)	Energy Policy in Japan
Prof. Watanabe (2)	Volcano and Earthquake in Japan
Prof. Fujioka	Contemporary Hunting & Gathering Culture in Japan
Prof. Woranski (1)	Communication and Miscommunication in Japan (1)
Prof. Woranski (2)	Communication and Miscommunication in Japan (2)
Prof. Schroder	ASEAN Economic Integration and Automotive Industry
Study Trip (1)	Hakata City Walking Tour and Handicraft Painting
Study Trip (2)	TOYOTA Factory Observation and CC2 Company Visiting
Study Trip (3)	Sado: Tea Ceremony
Study Trip (4)	Noodle Making and Mayonnaise Factory Observation

図表3はICJで興味深かった講義を順に最大5つ(rank 1からrank 5まで)回答してもらった結果を積み上げグラフで示している。総体的に課外学習であるスタディトリップの人気が高く、特に茶道体験や東長寺周辺の博多街歩きに対する評価が高い。このことから、本プログラム参加者が、キャンパスでの講義に加えて、キャンパス外での活動、研修に大きな興味関心を抱いていることが指摘できる。

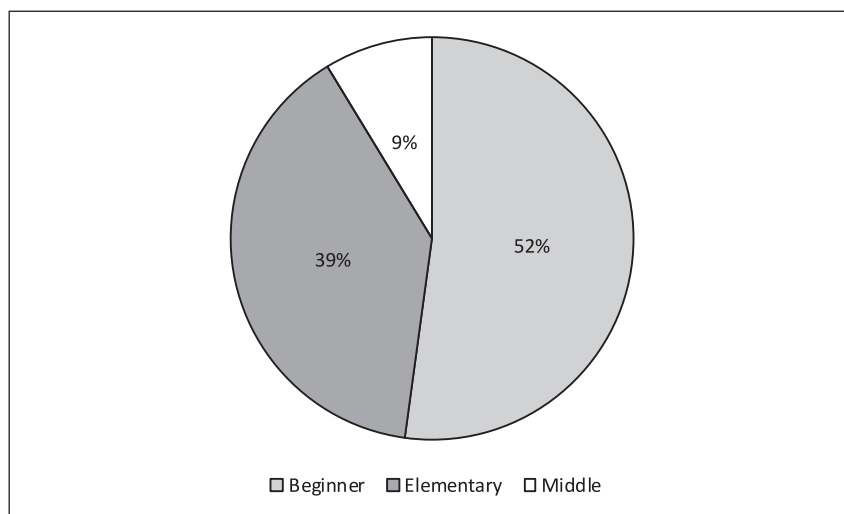


出所：筆者作成

【図表3：ICJで興味深かった講義ランキング】

4. 日本語 (Japanese Language) コース

今年度の日本語コースは、2つのプログラム合同で実施し、Beginner、Elementaryの2レベルで開講した。



出所：筆者作成

【図表4：日本語コースの各レベル構成人数】単位（割合）

今年度は予算の都合上、2クラスの開講となったため、下記プレースメントテスト結果により中級（Middle）に振り分けられた2名については、別途本学の地球社会統合学府に所属する博士課程学生にチューターを依頼した。中級は、当該学生とその指導教員で作成した講義内容に基づいて、原則として他の2レベルのクラスが開講している時限に実施した。各レベルの構成人数の割合は図表4の通りである。

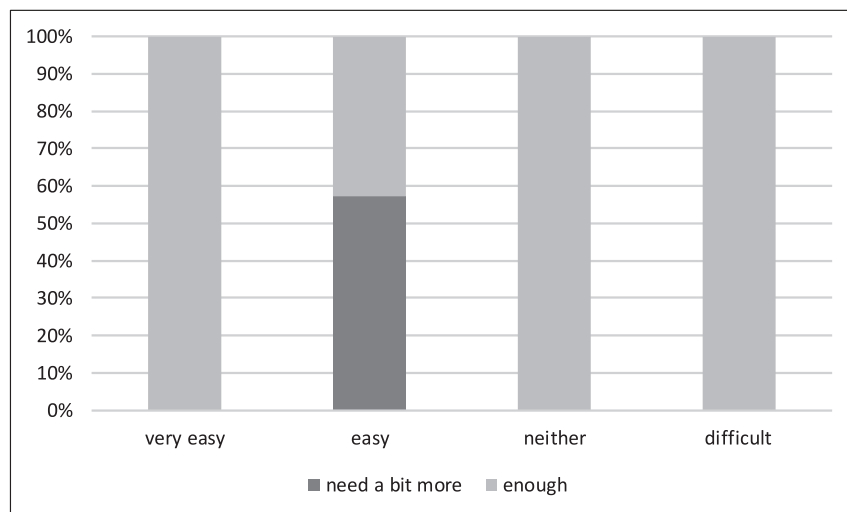
参加者のレベル分けについて、日本語を勉強したことのない者は本人の申告に基づき Beginner とした。その他の既習者および希望者は、留学生センター日本語教育部門が運営するオンラインプレースメントテストを受験してもらい、獲得点数に応じてクラスを編成した。参加者のうち約半数にあたる12名が Beginner、9名が Elementary であった。

教科書は『GENKI 2nd Edition』（The Japan Times）を使用し、Beginner はゼロ初級として、ひらがなから学習し、L.1からL.4までを学習し単文レベルの表現の習得を目標にした。Elementary はL.13からL.16までを学習し、やりもらいなど、関係に配慮した文型を学習した。コースの中間や終盤に Activity を入れ、教科書から離れた、短期コースならではの活動も行った（例：ホームステイ先での有用な表現や会話練習など）。

図表5は、日本語コース難易度と宿題量の自己評価をグラフ化したものである。

日本語コースの難易度を5段階（very easy、easy、neither easy nor difficult、difficult、very difficult）で回答した者が、宿題量についてどのように考えているかを5段階（too little、need bit more、enough、a bit too much、far too much）で自己評価してもらった⁵。

5 難易度を very difficult、宿題量を too little、a bit too much、far too much と回答した者はいなかったため、図表には反映させていない。

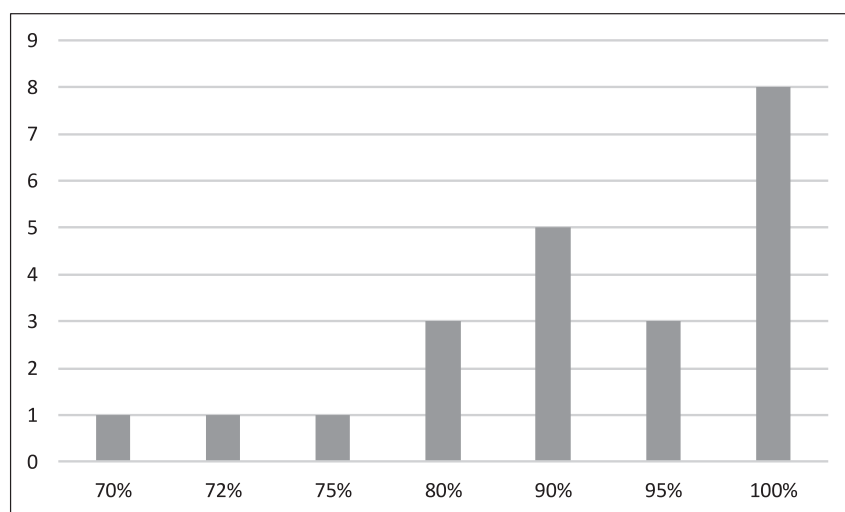


出所：筆者作成

【図表5：日本語コース難易度および宿題量の自己評価】

宿題量をみると、enough あるいは need a bit more という回答のみであった。難易度との関係性をみると、very easy、neither、difficult と回答した者全員が宿題量は適量であったと認識している。また、easy と回答した者の半数以上が、宿題がもう少しあってもよかったと考えている。これらの結果を鑑みると、日本語コースの難易度、宿題量ともにおおむね適切であったが、難易度を低く評価する者ほど、宿題量が少ないと回答する傾向もあると指摘できる。

また、図表6に示すように、日本語コースに対する満足度を0%から100%の範囲で自由記述してもらったところ、19名が満足度80%以上と回答していることから、総体的に日本語コースの満足度は高



出所：筆者作成

【図表6：日本語コースの満足度】

かった。

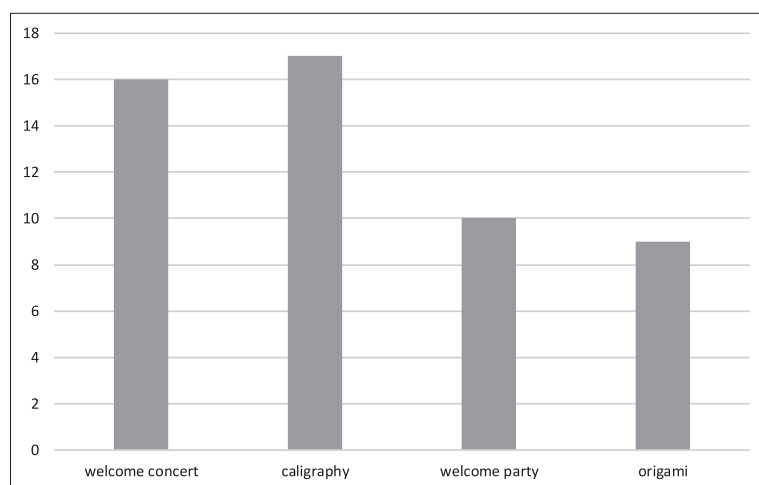
5. 九大生との交流

今年度のプログラムでは、本学学生との交流の場を積極的に設けることを目的として、各種学生サークルに声掛けをし、以下の交流活動を実施した。

- ◆ 邦楽・雅楽部によるウェルカム・コンサートと楽器演奏体験
- ◆ チューターとのウェルカム・パーティー
- ◆ 書道部との交流会
- ◆ 折り紙同好会との交流会

SIJ および Summer Program for EJEP は、開講期間が本学の前期セメスター、および夏学期と重なり、学生で賑わうキャンパスでの学生生活を体験することができる。その半面、4週間という限られた期間に、チューター以外の日本人学生との交流機会はわずかである。過去のプログラム参加者からは、日本の大学の部活動・サークル活動を見学してみたい、チューター以外と交流をしてみたいなどの声が寄せられており、これらの要望を受けて、今年度初めて交流活動を実施した。

以下の図表は参加者が最も楽しかったと回答した交流活動の集計である。回答は複数回答可とした。回答数の多かった2つの活動について概観しておく。邦楽・雅楽部によるウェルカム・コンサートおよび楽器演奏体験では、参加者のほとんどが初めて実物を目にする琴、三味線、尺八などの楽器を実際に手にとり、部員による指導のもと実際に音を出す体験をした。また、書道部との交流会では、部員から筆の持ち方、とめ、はね、はらいなどの基本的な筆の運びを教えてもらい、各自が好きな言葉や漢字の練習をした後、色紙に清書をした。当日活動をともした部員のなかには本学の外国人留



出所：筆者作成

【図表7：最も楽しかった学生との交流活動】

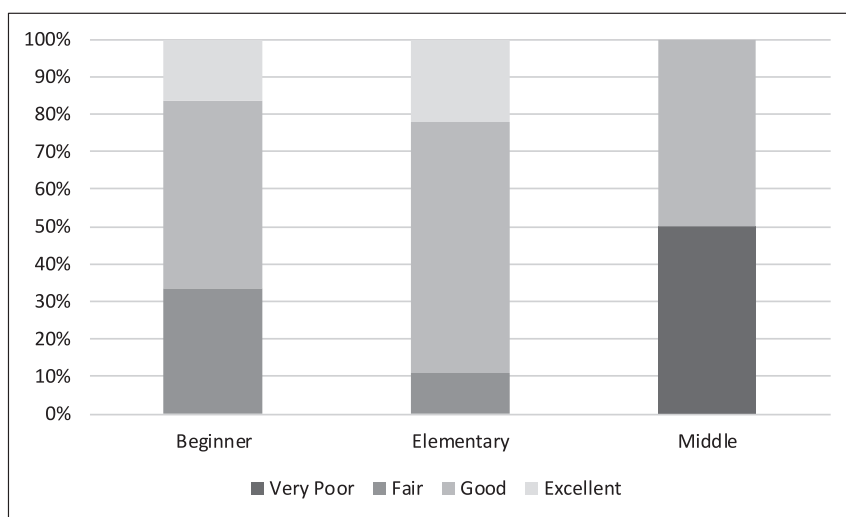
学生も含まれており、書道のみならず本学での留学体験、なぜ九大に留学したのかについても情報交換がなされていた。

6. 分析

最後に考えたいのが、プログラム全体の満足度である。ICJ や日本語コース、学生との交流活動については上述のとおりであるが、プログラム全体の満足度はどのような要因によって左右されたのだろうか。

まず、参加者の国籍や、専攻（所属学部）、年齢などの個人的属性とプログラム全体の満足度の関係を調べた。ところが、そこからは統計的に有意な結果を得ることができなかった。つまり、参加者の属性がプログラム全体の満足度を決める要因にはならなかったということである。

他方、全体の満足度に統計的に有意な影響を与えたのが、日本語コースのレベルであった。図表 8



出所：筆者作成

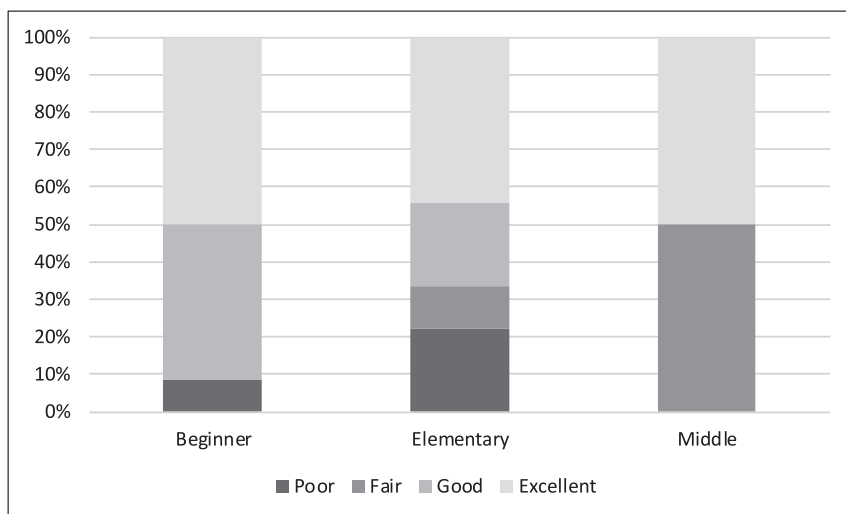
【図表 8：日本語レベル別 ICJ コースの評価】

は、日本語クラスのレベルごとの ICJ コースの満足度を集計したものである。この図表が示しているように、日本語のレベルが上がるにつれ、ICJ コースの評価が低くなっていることが分かる。中級レベルになると、ICJ コースを very poor と評価する者が半数に上っている。

他方、図表 9 に示すように、チューターについては参加者とチューター同士の個人的な相性や、チューターの忙しさ、会う頻度も関係し、日本語レベルと満足度は関連していないようである。

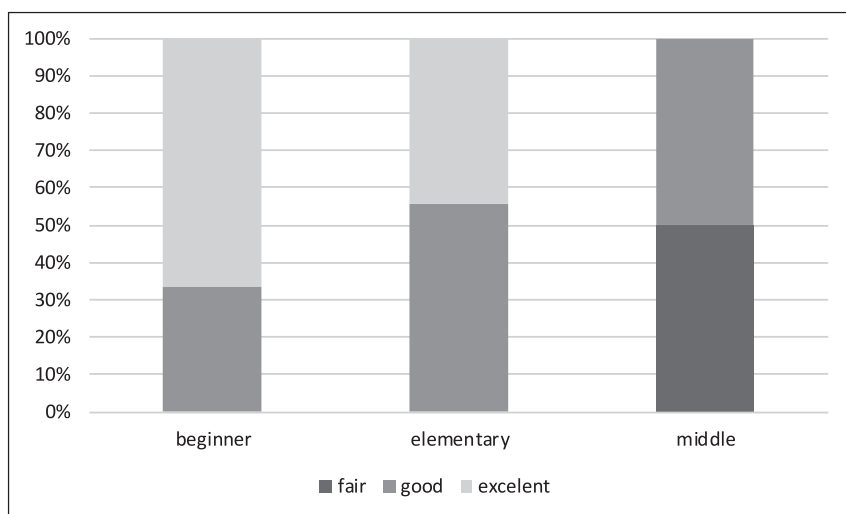
では、日本語レベルとプログラム全体の満足度はどうだろうか。図表10は、日本語のレベルごとにプログラム全体の満足度をどのように評価しているかを示したグラフである。

ここからわかるように、日本語レベルによってプログラム全体の満足度が異なることがわかる。日



出所：筆者作成

【図表9：日本語レベル別チューター制の評価】



出所：筆者作成

【図表10：日本語レベル別プログラム全体の満足度】

本語レベルがBeginnerの者は6割以上がExcellentと回答しているのに対し、Middleになると実に半数がFairと低く評価している（ χ^2 二乗検定優位率0.013）。

この結果を統計的に検証するために、プログラム全体の満足度を従属変数にしたロジスティック回帰分析を行った。従属変数となる満足度は、1=fair、2=good、3=excellentという順序のある変数であるため、順序ロジットモデルを援用した。独立変数には、記述統計から重要と考えられる日本語

レベル（1 = Beginner、2 = Elementary、3 = Middle）、日本語クラス難易度の評価（1 = Very easy、2 = Easy、3 = Neither easy nor difficult、4 = Difficult、5 = Very difficult）、宿題量（1 = too little、2 = need a bit more、3 = enough、4 = a bit too much、5 = far too much）、および統制変数として年齢を投入した。結果は図表11のとおりである。

【図表11：結果】

	B	標準誤差
年齢	0.401*	0.636
日本語レベル	-3.274***	1.622
日本語クラス難易度	2.736***	1.585
宿題量	1.053*	1.940
しきい値 1	0.475*	10.229
しきい値 2	9.570**	10.705
サンプル数	22	
χ^2	20.681	
対数尤度	1244.459	
Pseudo R2	0.562	

*p < 0.1 **p < 0.05 ***p < 0.01

出所：筆者作成

図表11の結果が示しているように、日本語レベルが高くなると、プログラム全体の評価が下がることがわかる。日本語レベルの変数の回帰係数が負の値をとり、統計的に優位になっているからである。同様に、日本語クラスの難易度を高く評価するものほど、言い換えるなら、日本語コースが難しいと考えている者（ゆえに自身の日本語レベルが低い者）ほど、プログラム全体の満足度が高くなることも分かった。総じて言えば、日本語のレベルが低い者はプログラム全体の満足度が高く、レベルが上がるにつれて満足度が下がるという結果が明らかになった。

7. おわりに

本報告書では、SIJ および Summer Program for EJEP の参加者に対してプログラム最終日に実施した選択・記述式アンケート調査の結果に基づいてプログラムの各要素と全体の評価および満足度について考察を行ってきた。有効回答数が23であるため、十分なサンプル数とは言えないが、今年度のプログラムでは、日本語レベルが高いほどプログラム全体への満足度が低くなっていく傾向が確認できた。この分析結果は、来年度のプログラムを実施する際に、中級以上の日本語レベルの留学生に対するプログラム内容をより充実させる必要があることをしめしている。この点に留意し、次年度のプログラムを改善していく必要があるだろう。他方、今年度初めて取り入れた学生サークルとの交流は、本学学生にも同年代の留学生との交流機会となったため、継続して実施したい。

Kyushu University Japan in Today's World (JTW)

A Program Overview in Celebration of the 25th Anniversary

Masa Higo *

Ryoichi Imai *

Chisato Nonaka *

Faculty Coordinators

Kyushu University Japan in Today's World Program

Celebrating the 25th Anniversary of JTW

First founded in 1994, Kyushu University's Japan in Today's World Program (JTW) celebrated its 25th anniversary this October; the students currently enrolled in this program are the 25th Class. JTW is one of Kyushu University's flagship, short-term study programs for international students. It annually accepts exchange students from the University's partner institutions that lead today's higher education around the world, thereby having played since its inception a key role in the University's wider efforts to promote and enrich international education. In celebration of the 25th anniversary, this short article dedicates itself to briefly reviewing the history and primary roles of this program and overviewing its key characteristics.

JTW is a one-year, English-based study program designed primarily for undergraduate students of Kyushu University's partner institutions. Opposite of the typical, domestic academic calendar, it is designed to begin in the fall semester and end in the spring (lasting from October through July) due largely to its need to accommodate the typical calendars of many of the partner institutions abroad, particularly those in North America and Europe. English is the medium of communication for all learning activities of the JTW Program, with the exception of Japanese language classes, as this program is designed, as explained below, primarily to accept and educate international students who are interested in learning or deepening their understanding of Japanese culture and society while their proficiency in Japanese language is at an early stage of acquisition.

*Professor of Kyushu University International Student Center



Photo 1. The 25th Class of JTW at Kyushu University Fall 2018 Opening Ceremony for Short-Term Programs for International Students¹

The Program Operation

Kyushu University International Student Center (ISC) operates JTW every year. ISC is a unit of faculty members with a range of international backgrounds in teaching, research, and student advising within higher education. As listed in Table 1, as of 2018, three ISC faculty members – the authors of this report – serve as the faculty coordinators and contribute to the program primarily in instructional and advising capacities.

The JTW Office provides the program with a variety of administrative support. Consisting of staff members of the Division of International Student Exchange, an internal unit of Kyushu University's Department of International Affairs, the Office assists the participants with their various procedural needs for their daily student lives. The areas of their administrative support include, but are not limited to, those pertaining to immigration processes, scholarship, health insurance, and accommodation.

Together, the faculty coordinators and the staff members of the JTW Office constitute the JTW Team (see **Table 1**). The primary aim of this team is to provide the participants with a package of comprehensive support, including both educational and administrative, from their program application through smooth entry to successful completion of the program.

1 The Division of International Affairs at Kyushu University offered this official photo on behalf of this article.

Table 1. Members of the JTW Team

JTW Faculty Coordinators			
Primary Coordinator	Masa HIGO	Ph.D. (Sociology)	Boston College (USA)
Coordinator	Ryoichi IMAI ²	Ph.D. (Economics)	U of Pennsylvania (USA)
Coordinator	Chisato NONAKA	Ph.D. (Education)	U of Hawaii (USA)
JTW Office			
Division of International Student Exchange, Department of International Affairs			

The Program Missions

Broadly, the primary missions of the JTW Program are two-fold: educational and strategic. International students are the subject of the educational mission; it aims to nurture coming generations of Japanophiles or even Japan-experts in a variety of professional fields around the world. Japan as a country has faced a gradual decline of the population in an increasingly competitive world economy. These broader trends have placed all universities in Japan, Kyushu University included, to generate a potential workforce that will contribute to the country in the future. JTW was launched to introduce its participants to basic knowledge about contemporary Japanese society and culture – including the language – as a way to help address this broad national challenge.

The strategic mission targets domestic students at Kyushu University, Japanese students in particular. As its core expectation, the student exchange agreements, which are made typically through Memoranda of Understanding, require active student exchange between the partner institutions; namely, inbound student mobility (accepting exchange students from partner institutions) enables outbound student mobility (sending domestic students to the partner institutions). Providing incoming exchange students with quality international education is at the core mission of JTW per se. Simultaneously, JTW also dedicates itself to doing so in order to provide or expand opportunities for domestic students to go on exchanges to the University's leading partner institutions around the world.

The Program Design

The JTW Program is designed to offer a comprehensive package of learning-and-living experiences based on a multi-dimensional approach to facilitate the participants' understanding of Japan in our rapidly changing cultural, social, economic and political landscapes around the world. As mentioned earlier, English is used as the medium of instruction, and a variety of resources and opportunities for immersion

² Dr. IMAI also serves as ISP Director. ISP stands for Independent Study Projects, which are optional academic activities for credit as official component of the JTW Program.

experience are offered. This way, the participants may learn – academically and experientially, both in and beyond the classroom – contemporary Japanese society and culture in an effective and efficient way even without proficiency in Japanese language prior to participating in the program.

Throughout the program period, the JTW program provides its participants with eight sets of learning opportunities and resources as illustrated below in **Figure 1**.

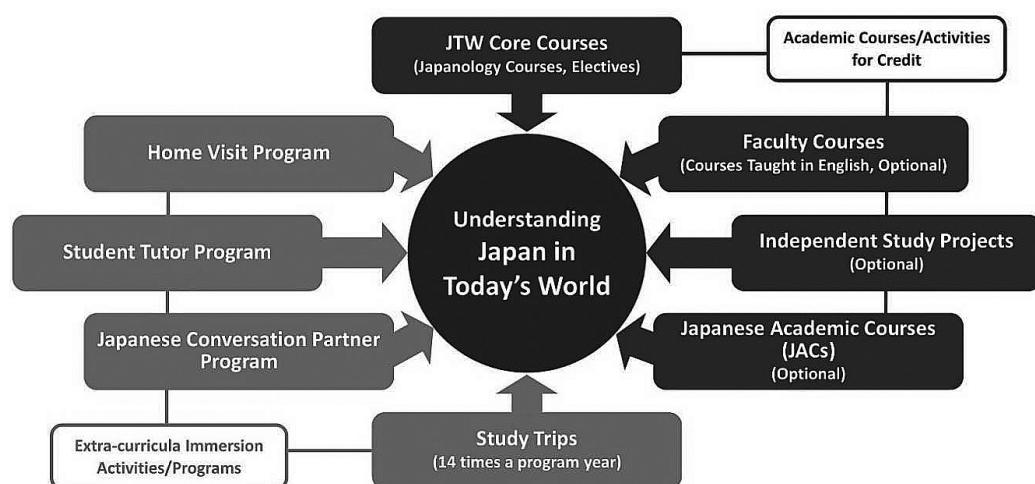


Figure 1. Program Components of JTW

The first four of the eight program components are offered for academic learning for formal credit. The JTW Program challenges students with a broad range of JTW Core Courses and Faculty Courses – rigorous, challenging subject courses taught in English – as well as the option to work on Independent Study Projects, which require self-driven research activities and public presentations at the end of the semester. For language acquisition, JTW offers nationally renowned Japanese Academic Courses (JACs). Credits are transferrable to the participants' home institutions contingent upon their permission. JTW Core Courses are offered as electives, and all the others are optional, although every year most participants enroll in some JACs.

The last four components are extra-curricular activities aiming to facilitate the participants' immersion into contemporary Japanese culture. For every program year the JTW Program arranges and conducts about 14 Study Trips across the Northern Kyushu region, where the participants experience, for instance, rice planting and harvesting instructed by local farmers, seated meditation at a historic Buddhist temple, visiting one of the most competitive Sumo Stables across the country, and learning the history of the Atomic Bombing by visiting Nagasaki. The participants may also take advantage of the Japanese

Conversation Partner Program to enhance their learning outcome from JACs. Further, with the Student Tutor Program, each participant is given a “tutor,” a domestic student who signs up for supporting his or her participant’s smooth adjustment to academic and daily life matters and offering friendship throughout the program year and beyond. The JTW Program also offers the Home Visit Program, which provides participants with opportunities to interact and develop friendship with local residents on a regular basis.



Looking Back: The Inception of JTW

The JTW Program first started in 1994 with 14 participants, 12 of whom were from partner institutions in the United States. The program was launched in response to a diplomatic request made by *The U.S.-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange* (CULCON), a binational advisory panel established primarily to strengthen cultural and educational exchanges between the two countries.

Founded during the 1960s under the leadership of John F. Kennedy, the 35th President of the United States, and Hayato Ikeda, the 38th Prime Minister of Japan, CULCON encouraged the then Japanese Ministry of Education to help increase opportunities for American students to go on exchanges to universities in Japan. This was because during this time, while an increasing number of America’s younger generation were interested in studying in Japan to learn its culture and society first-hand, unfamiliarity with Japanese language stood as a major challenge to many of them. Kyushu University was the first national university in the country to respond to this international call for cross-cultural higher education. At the beginning, the JTW Program was thus designed for American students to study for credit for a year without possessing the level of proficiency in Japanese that is sufficient to study academic subjects in Japanese.



Photo 2. U.S. President Kennedy and Japanese PM Ikeda at a CULCON meeting³

3 This photo is copyright free and is available at: <https://www.jfklibrary.org/asset-viewer/archives/JFKWHP/1961/Month%2006/Day%2020/JFKWHP-1961-06-20-A>

The Growth of JTW to the Present

Since its birth to the present, JTW as a one-year, annual program has increasingly widened its gates and expanded its size. **Figure 2** shows the trend of the number of exchange students participating in JTW from Program Year 1994-95 through 2018-19 (the 1st through the current, 25th Class). Starting with 14 participants, the number grew to 29 in Program Year 2001-02 (the 8th Class), and it continued to jump reaching 48 in 2007-08 (the 14th Class) and on to 66 in 2015-16 (the 22nd Class). Since Program Year 2008-09 (the 15th Class), JTW has hosted an annual mean of 59.4 exchange students (median: 60).

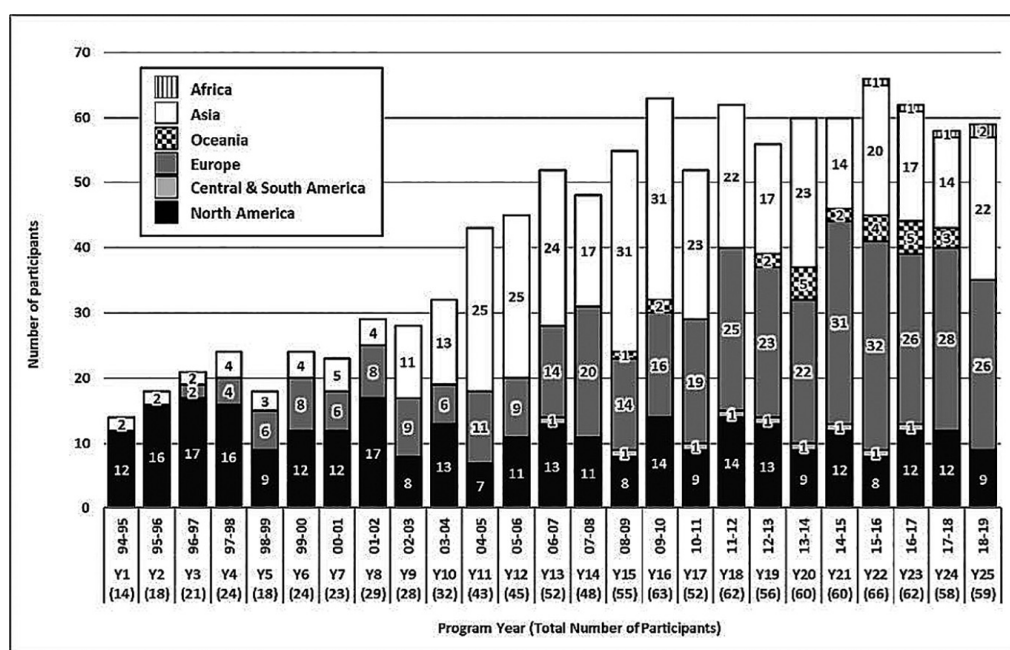


Figure 2. Composition of JTW students, by world regions in which their home institutions are located, Program Year 1994-95 – 2018-19 (from the 1st through the 25th Class)

The regional backgrounds of the participants have also grown more diverse. Originally starting with students mostly from the U.S., particularly since Program Year 2008-09 (the 15th Class), the JTW Program has regularly hosted students from more than 15 different countries and regions located in four major regions of the world, including Europe, Asia, Oceania, Central and South America as well as North America. It's also worthwhile noting that since 2015-16 (the 22nd Class) JTW has annually accepted students from Egypt. This new growth has made JTW an ever more diverse program hosting students from five major world regions including Africa.

The 25th Class of JTW – A Brief Student Profile

Since the beginning of the program, most participants have been those studying at an undergraduate level at their home institutions, and this is still the case. Many of their home institutions are considered leading universities around the world by major world university ranking schemes including *Times Higher Education World University Rankings* and *QS World University Rankings*. Exchange students from such competitive and prestigious partner institutions make a significant contribution to creating academically competitive and stimulating environments, not only among the program participants but also across the wider campus of Kyushu University.

Program participants' academic backgrounds (majors and minors at their home institutions) are significantly diverse, ranging from natural sciences and social sciences to humanities. Nonetheless, throughout the history of the program, a significant portion of the participants' major or minor studies have been in fields closely associated with Japanology, an interdisciplinary study focusing on Japanese culture, society, economy and/or politics from a global or cross-national comparative perspective. Though the level of their proficiency in Japanese language also substantially varies, a large portion of them are at an absolute beginner to lower intermediate level.

Table 2 summarizes basic demographic background of the current, 25th Class of the JTW Program. This class consists of a total of 59 participants – 22 male and 37 female students – from 33 partner institutions located in 14 countries and regions of the world, which spread across Europe, North America, Asia and Africa. Table 2 also lists the participants' academic grades at their home institutions, age, gender, and period of their participation in the JTW Program.

Table 2. Demographic Characteristics of the 25th Class of JTW

Student #	Home Institution	Country/Region	Major (Minor)	Grade ⁴	Age	Gender	Period ⁵
1	U of Washington	United States	Japanese Literature	B2	20	F	1Y
2	U of Washington		Japanese Language	B3	21	M	1Y
3	U of Washington		Communication	B3	23	F	1Y
4	U of Georgia		Linguistics	B2	21	F	1Y
5	U of Georgia		Computer Science	B1	20	M	1Y
6	U of Georgia		Mechanical Engineering	B3	21	M	1Y
7	San Jose State U		Linguistics and Japanese	B3	21	F	Fall
8	Arizona State U		Anthropology	B3	20	F	1Y
9	Arizona State U		Philosophy	B2	21	M	1Y

4 "B" signifies a baccalaureate level, and "M" a master's level.

5 Period of program participation.

10	U of Bristol	United Kingdom	Law	B2	20	F	1Y
11	U of Bristol		Law	B2	20	F	1Y
12	U of Leeds		Music	B2	21	F	1Y
13	U of Leeds		Art & Design	B2	20	F	1Y
14	U of Leeds		Chinese & Japanese	B1	20	M	1Y
15	U of Sheffield		Japanese Studies	B2	23	F	1Y
16	Newcastle U		Japanese Studies	B2	20	M	1Y
17	U of London, SOAS		Japanese	B2	22	F	1Y
18	U of London, SOAS		Japanese & Social Anthropology	B2	23	F	1Y
19	U of Bordeaux 3	France	English & Japanese	B2	20	F	1Y
20	U of Bordeaux 3		English & Japanese	B2	19	M	1Y
21	U of Bordeaux 3		English & Japanese	B2	19	F	1Y
22	Université de Provence - Aix-Marseille I		Applied Foreign Languages	B3	23	F	1Y
23	Université de Provence - Aix-Marseille I		Japanese Language and Literature	B3	27	M	1Y
24	Universite Grenoble Alpe		Business & Management	B2	19	F	1Y
25	U of Strasbourg		English & Japanese	B2	28	M	1Y
26	Hohenheim U	Germany	Communication Science	B2	23	F	1 Y
27	Heidelberg U		Mathematics	B3	21	F	Fall
28	Technical U of Munich		Informatics	B1	27	M	Fall
29	Technical U of Munich		Informatics; Games Engineering	B2	21	F	Fall
30	Technical U of Munich		Electrical Engineering & Information Technology	B3	20	M	Spring
31	Catholic U of Leuven	Belgium	Japanology	B3	21	F	1Y
32	Stockholm U	Sweden	Management	B2	21	M	Fall
33	Stockholm U		Development Studies	B2	22	M	1Y
34	Uppsala U		Mechanical Engineering	B2	26	M	Fall
35	Uppsala U		Information Technology	B2	24	M	1Y
36	Cairo U	Egypt	Japanese Language and Literature	B3	23	F	1Y
37	Cairo U		Japanese Linguistics	B3	21	F	Spring
38	Wuhan U	China	Chinese Language and Literature	B3	20	F	Spring
39	Huazhong U of Science & Technology		International Business & English	B2	19	M	Spring
40	BeiHang U		Industrial Design	B4	21	M	Spring
41	BeiHang U		Software Engineering	B3	21	M	Spring

42	Chinese U of Hong Kong	Hong Kong - China	Chinese Language Studies	B2	20	F	1Y
43	U of Hong Kong China		Surveying	B3	21	M	Spring
44	U of Hong Kong China		Surveying	B3	20	F	Spring
45	Yonsei U	South Korea	East Asia Business & Economy	B2	21	F	Spring
46	Korea U		Major: History Minor: Economics	B2	22	M	Spring
47	Seoul National U		Physical Education	B3	23	M	Spring
48	National Tsing Hua U.	Taiwan	Mechanical Engineering	M2	25	F	Fall
49	National Tsing Hua U.		Marketing	M2	25	F	Fall
50	National Taiwan U		Psychology	B3	21	F	1Y
51	Indian Institute of Technology, Madras	India	English Studies	B4	23	F	Fall
52	Gadjah Mada U	Indonesia	Electrical Engineering	B3	21	M	Fall
53	Gadjah Mada U		Architecture	B4	22	F	Fall
54	Gadjah Mada U		Psychology	B3	20	F	Fall
55	Gadjah Mada U		Forest Management	B3	20	F	Spring
56	Gadjah Mada U		Public Policy and Management	B4	19	F	Spring
57	National U of Singapore	Singapore	Japanese Studies	B2	22	F	Fall
58	National U of Singapore		Japanese Studies	B2	20	F	Spring
59	National U of Singapore		Economics	B3	21	F	Spring

JTW's Contributions to Kyushu University Campus

As explained earlier, the JTW Program dedicates itself to offering quality learning-and-living experiences for exchange students from Kyushu university's leading partner institutions around the world, thereby expanding opportunities for the University's domestic students to go on exchanges to those institutions. Today, JTW's contribution goes well beyond these conventional missions; particularly over the past five years, it has come to make invaluable contributions to internationalizing Kyushu University Campus at least in the following three areas:

- (1) The JTW Program adds to the campus community a microcosm of the ever diversified world today. The culturally and ethnically diverse body of students from all around the world provides the University's faculty members and administrators as well as local students with a rich resource for cross-cultural interactions and exchanging ideas.
- (2) JTW has also served as powerful leverage to expand Kyushu University's partnerships with

leading universities around the world for student exchange. In the ever competitive ‘global market’ of student exchange, the quarter century successful legacy of this dynamic study program for international students has served as a symbol of Kyushu University’s dedication to and successful effort for international education.

- (3) Finally, but not necessarily last, the JTW Program stands as a primary source of motivation for Japanese students to go global for their own learning experience in their daily campus life. Friendships with JTW students often encourage them to expand the horizons of their academic and career prospects by studying abroad, just as their JTW friends do here at Kyushu University.

2017年度九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

Report on International Students' Advising and Counseling Division (2017)

高 松 里*

1. はじめに

九州大学留学生センター・留学生指導部門は、外国人留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な活動を行っている。

留学生指導部門の活動は、①相談活動（アドバイジング&カウンセリング）、②教育活動、③留学生への支援システムの形成、④研究・研修活動、⑤学内協力講座・委員会、⑥社会連携、である。

2. 相談活動

(1) 相談室および担当者

留学生センターは、センター本館がある箱崎キャンパスおよび伊都キャンパスに相談室を設けている。箱崎キャンパスではほぼ毎日、伊都キャンパスでは、週3回の相談活動を行った。その他、必要に応じて、他のキャンパスでも相談を受けている。

相談担当者は、白土悟（2018年3月で定年退職）と高松里の2名である。

なお高松は、九州大学キャンパスライフ・健康支援センター（兼務）において、カウンセラー（留学生担当）としても活動している。

(2) 来談状況

相談室における相談件数は表1の通りである。ここでいう相談件数には、数分で終わるような簡単な情報提供は含まれていない。比較のために、2016年度の相談件数も併記した。相談延べ件数は、675件であり、前年度（665件）とほぼ同数であった。留学生からの相談が増え（283件→334件）、日本人からの相談（留学生関係）が減っている（326件→277件）。

①「留学生からの相談」は334件であった

「修学問題」は182件であり、前年度（114件）より増えた。単位履修の問題や将来どのような研究生生活を続けていくかなどの相談があった。また、研究室における指導教員や他の学生との関係についての相談が増えた。研究室を移動するケースもいくつかあった。

*九州大学留学生センター准教授

表1 九州大学留学生センター相談件数

留学生からの相談		2016年度	2017年度
修 学	入学・進学関係	23	33
	教育制度・内容	23	34
	進路相談	35	65
	研究室の人間関係	33	50
生 活	法律的問題	4	0
	経済的問題	18	2
	宗教的問題	0	0
	宿舎問題【国際交流会館】	2	2
	宿舎問題（その他）	0	1
	生活問題	5	6
	事故病気等	5	0
	渡日・滞日許可	4	0
	人間関係	29	0
	子弟の教育問題	2	0
	帰国準備	5	0
	メンタルヘルス	91	136
その他	国保・一般保険	0	0
	各留学生会	5	2
	その他分類不可	1	3
小 計		283	334

その他の外国人からの相談

	入進学	51	49
	その他	5	15
小 計		56	64

日本人からの相談

学 生	留学生とのトラブル	0	0
	海外留学情報	8	1
	国際親善会関係	0	1
	その他	63	38
教職員	入進学	0	2
	奨学金	0	0
	日本語関係	8	0
	コンサルテーション	125	139
外 部	その他	11	10
	情報・コメント	47	45
	留学生との交流	53	27
	入進学	1	3
	苦情	0	1
	その他	10	10
小 計		326	277
総 計		665	675

員が必ずしも留学生について詳しいわけではない。様々な問題の解決について、一緒に考えている。

「外部」からの相談（86件）では、地域団体（国際化協会や警察など）との情報交換や情報提供が多かった。

「生活問題」は147件で、前年度（165件）より少し減った。最も多かったのはメンタルヘルスに関する相談136件（前年度91件）であり、これは年々増えている。不安、不眠、鬱、発達障害の学生の相談などがあった。人間関係についての相談が0件（前年度29件）となっているが、人間関係に問題がなかったわけではなく、多くはメンタルヘルスの問題と考えられ、集計された結果と思われる。

「その他」は、5件（前年度6件）であり、各留学生会の行事などについての相談、イスラム学生のイベント開催などについての相談などがあった。

②「その他の外国人からの相談」は64件（前年度56件）であった

大学院に入学を希望している学生（日本語学校の留学生や本国にいる学生）からのものが多い。まず研究生として入学したいが、その手続きが難しい、受け入れてくれる先生をどうやって探すのか、などの相談があった。

③「日本人からの相談」は、277件（前年度326件）であった

「日本人学生」からの相談は40件で前年度（71件）より減った。海外留学、国際交流に関する相談があった。

「教職員」からの相談（151件）の中では、「コンサルテーション」が最も多い（139件）。留学生を直接指導したりサポートをしている教職員からの相談である。留学生が増えていくが、教職

3. 教育活動

(1) オリエンテーション

留学生課が主催して、新入留学生が入学してくる直前の9月と3月に「サポートチームオリエンテーション」を実施し、入学後の4月と10月に「新入留学生オリエンテーション」を実施している。指導部門の教員はこれらのオリエンテーションに関与している。

また、2018年3月に、「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2018年度版」を4,000部を印刷発行し、九州大学の入学式後のオリエンテーション等で配布した。

(2) 授業

2015年度は、学部基幹教育（主に学部1年生を対象）2コマ+1回、人間環境学府5コマ+2回、大学院基幹教育1コマ、留学生センター関連1コマを担当した。

表2 担当授業（2017年度）

	前 期	後 期
学部基幹教育	フロンティア科目「日本事情」（水曜日4限、高松） 総合科目「大学とは何か」（水曜日5限、リレー講義1回、白土）	
大学院 （人間環境学府）	「国際教育交流論究」（水午前、白土） 「留学生教育政策論」（金6限、白土） 「教育学研究法－国際教育」（リレー講義、1回、白土）	「国際教育交流論究」（水午前、白土） 「留学生アドバイジング論」（集中、白土） 「異文化適応論」（集中、高松） 「教育学研究法」（リレー講義、1回、白土）
大学院基幹教育		「異文化理解の心理学」（金曜日5限、高松・小田）
留学生センター		日韓共同理工系学部留学生予備教育「日本文化・日本事情」（木曜日3限、白土・高松）

4. 留学生に対する支援システムの形成

(1) サポートチームおよびチューターへの支援

①学部サポートチーム

学部留学生（1年生）に対しては、指導部門教員がサポートチームの指導にあたった。

②日韓共同理工系学部留学生予備教育・チューター

10月に来日した予備教育留学生のためのチューター（6ヶ月）に対してオリエンテーションを行った。

(2) 初期適応支援

学部留学生に対しては、入学直後に「履修説明会」を行っている。ここで授業（日本語や日本事情）について説明すると共に、日本人学生の特徴や友達の作り方を説明している。また、前期には基幹教

育「日本事情」(多文化クラス)を行い、日本人との接触機会を提供している。

後期には、大学院基幹教育「異文化理解の心理学」において、日本人との交流と文化理解の機会を提供している。

その他、指導部門教員が顧問をしている社会人ボランティア団体(そら)によって「市内ツアー」などが実施され、留学生が日本社会に適応しやすいように支援している。

(3) 学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。九州大学留学生会は白土が、九州大学ムスリム学生会と九州大学国際親善会は主に高松が顧問として、様々な活動や要望に対して助言を行った。

①九州大学留学生会(KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association)

九大に所属する全留学生を代表する会である。4月に「スポンサーミーティング」が行われ、1年間の活動について、地域の支援団体と共に検討を行った。その他、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

②九州大学ムスリム学生会(KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association)

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生(約350人)の団体である。

イスラムウィーク(パネル展示、イスラム衣装の紹介、アラビア書道、映画、講演、お菓子、各国の料理提供)が、九大ムスリム学生会が主催し、図書館、国際親善会、留学生センターが協力する形で実施された。

また、ラマダン(断食月)に関連してイフタルパーティが実施された。

③九州大学国際親善会(KUIFA=Kyushu University International Friendship Association)

毎年の活動としては、2月の「受験生案内」、4月と10月の「新入留学生支援」、5月から行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」などである。また、箱崎地区で毎週木曜日に「コーヒーアワー」、伊都地区では毎週火曜日に「全学コーヒーアワー」(センターゾーン)、毎週金曜日に「糸島コーヒーアワー」(ウェストゾーン)を行っている。

(4) ボランティア団体への助言・指導

①「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言(白土)

九州大学には家族同伴の留学生が約400人いる。400人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本人女性で構成される団体であり、会員数は約35人、九州大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業(毎週12:30~14:20)および交流会(月1回14:30~16:30)である。これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。

なお、白土退職に伴い、本活動は2018年3月で終了した。

②「九州大学留学生サポートネットワーク〈そら〉」の活動への助言（高松）

〈そら〉は、社会人を中心としているが、九大の学生（留学生）や他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした4月の花見、10月の市内ツアー、井尻国際交流会館における「日本語交流」、伊都協奏館での文化イベントの企画などの活動を行っている。

5. 研究・研修活動

（1）著書・論文・報告

高松里（2017）。「最後の1個」問題―留学生と見た日本人の謎。臨床心理学, 17（3）, 391.

高松里（2017）. サポート・グループ。臨床心理学, 17（4）, 516-517.

高松里・小田真二（2018）. 大学院生を対象とした多文化クラスの試み―大学院基幹教育「異文化理解の心理学」。九州大学学生相談室紀要・報告書, 4, 27-33.

高松里・井内かおる・本山智敬・村久保雅孝・村山正治（2018）. オープンダイアログが拓く風景―2017年フィンランド・ケロプダス病院研修から学んだこと。九州大学学生相談室紀要・報告書, 4, 65-81.

高松里（2018）. 2016年度外国人留学生対象の相談実施状況。九州大学学生相談室紀要・報告書, 4号, 103-110.

高松里（2018）. 留学生のことをもっと知りたい日本人学生・教職員のための留学生超入門2018年度版。九州大学留学生センター

（2）学会発表等

高松里（2017）. 留学生カウンセリングの実際と課題―九州大学留学生教育センター相談室の活動とその特徴。人間性心理学会第36回大会、プログラム・発表論文集、108-109.

高松里・田代順（2017）. ワークショップ「ナラティブなアプローチをナラティブな方法で学ぶ／実践する」。人間性心理学会第36回大会、プログラム・発表論文集、42.

（3）研究活動

- ・ 4月10日（月）：中国教育史研究会（白土）
- ・ 4月15日（土）：人間環境学府・教育史・教育哲学研究会（白土）
- ・ 4月29日（土）：音についてのワークショップ「第4回自由音楽会」実施（箱崎、高松）
- ・ 5月13日（土）：スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄・スタッフミーティング（高松）
- ・ 6月5日（月）：中国教育史研究会（白土）
- ・ 6月26日（月）：人間環境学研究院・国際教育文化研究会（白土）
- ・ 6月16日（金）・17日（土）・18日（日）：異文化間教育学会（東北大学、白土）
- ・ 6月16日（金）～19日（月）：ワークショップ「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」開

催（名護、高松）

- 7月29日（土）・30日（日）：人間環境学府・比較教育学研究室合宿（白土）
 - 7月30日（日）：「自由音楽会」反省会&来年の計画（福岡市、高松）
 - 8月13日（日）～8月17日（木）：「アンティシペーション・ダイアログおよびオープン・ダイアログ研修会」（フィンランド、高松）
 - 8月19日（土）：九州シルクロード協会・講演「中国初期の社会変革と教育政策」（白土）
 - 8月20日（日）：人間環境学府・教育史・教育哲学研究会（白土）
 - 9月8日（金）～10日（日）：日本人間性心理学会にてワークショップ講師・個人発表・座長（名古屋、高松）
 - 9月9日（土）：IDE九州支部夏季研修会（国際的な高大接続に関するセミナー、白土）
 - 10月14日（土）・15日（日）：比較教育学会・三大学セミナー（京大・名大・九大）にて講演「留学生教育と中国研究」（白土）
 - 10月28日（土）：九州シルクロード協会・講演会（白土）
 - 11月19日（日）：人間環境学府・教育史・教育哲学研究会（白土）
 - 11月19日（土）～21日（火）：日本心理臨床学会（司会）（横浜、高松）
 - 12月2日（土）：九州シルクロード協会・講演会（白土）
 - 12月6日（水）：人間環境学研究院・国際教育文化研究会（白土）
 - 12月9日（土）：異文化間教育学会・理事会（明治大学、白土）
 - 12月10日（日）：異文化間教育学会・特定課題研究会（東京大学、白土）
 - 12月23日（土）～24日（日）：エンカウンター・グループ・ファシリテーター研修会（湯布院、高松）
 - 2月17日（土）：異文化間教育学会セミナーにて発表（同志社女子大学、白土）
 - 3月3日（土）：中国留学教育史研究会・国際シンポジウムにて発表（神奈川大学、白土）
 - 3月3日（土）：中国留学生史研究会主催「国際シンポ」（神奈川大学）にて発表「中国人留学生の大学院進学アドバイジングの課題」（白土）
 - 3月12日（月）～19日（月）：教育学部「海外フィールドワーク・トライアル in 中国2017」にて、学生引率して中国の大学と交流（白土）
 - 3月13日（火）：スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄・スタッフミーティング（福岡市、高松）
- ※「人間性心理学研究」投稿論文査読（高松）

6. 学内協力講座・委員会・その他

学内での委員等は以下の通りである。

①留学生センター関係委員会

- 日韓共同理工系学部留学生コーディネーター会議（白土、高松）

②学内協力講座関係

a) 人間環境学府関連

- 研究指導（白土）
- 博士課程論文調査委員会（白土）
- 修士論文口述試験（白土）
- 修士課程（社会人特別選抜）前期・後期入試（白土）
- 修士課程（一般）前期・後期入試（白土）
- 修士・博士学位授与式（白土）
- 教育システム専攻会議（白土）
- 人間環境学府附属総合臨床心理センター研究員（高松）

b) キャンパスライフ・健康支援センター関連

- センター委員会（高松）
- カウンセラー会議（高松）
- 事例検討会（高松）
- 相談担当者会議（高松）
- 非常勤カウンセラーミーティング（高松）
- 学生相談室会議（高松）
- 学生相談地区別連絡会議（高松）
- 「他大学からの新入大学院生オリエンテーション」（高松）
- 常勤カウンセラー研修会（高松）

c) その他

- 比較社会文化学府・博士論文審査委員会（白土）

③学内FD等

- 11月1日（水）：箱崎文系地区ハラスメント防止セミナーにて講演「留学生とはどういう人たちなのか？－カウンセラーから見た留学生と日本社会」（箱崎、高松）
- 1月31日（水）：留学生センターFD出席（高松）

④外部非常勤等

- 九州産業大学国際文化研究科臨床心理センタースーパーバイザー（継続）（高松）

7. 社会連携

- 4月1日（土）：福岡大学にて講演「異文化ストレスとそのつきあい方」（福大国際センター主催、高松）
- 4月1日（土）：九州シルクロード協会・講演会（九大事務局、白土）
- 4月22日（土）：福岡帰国留学生交流会・総会（白土）
- 4月25日（火）：九州シルクロード協会・運営委員会（白土）

- 4月26日（水）：九州国際学生支援協会（白土）
- 4月27日（木）：平成29年度新任被害者担当官等研修（法務省保護局）にて講演「犯罪被害者等の心理と援助の方法」（東京、高松）
- 5月11日（木）：内浜小学校日本語支援担当者（3名）との打ち合わせ（伊都、留学生課、高松）
- 5月23日（火）：九州・シルクロード協会理事会（白土：本会名誉会長・総長）
- 5月25日（木）：国土交通省：海ノ中道海浜公園ユニバーサルデザイン委員会の下打合せ（白土）
- 6月5日（月）：国土交通省・海ノ中道海浜公園UD委員会打合せ（白土）
- 6月13日（火）：九州国際学生支援協会（理事会・総会・講演会、白土）
- 6月24日（土）：九州シルクロード協会・研究交流会（白土）
- 7月1日（土）：福岡国際育成会・理事会（今宿国際交流会館運営、理事・白土）
- 7月13日（木）：山口被害者支援センターにて講演「セルフヘルプ・グループの意義と支援」（山口市、高松）
- 8月27日（日）：福岡帰国留学生交流会役員会（副会長・白土）
- 9月6日（水）：九州国際学生支援協会・事務局会議（白土）
- 9月11日（月）：福岡大学にて講演（留学生別科および交換留学生対象、高松）
- 9月12日（木）：福岡帰国留学生交流会打合せ会議（白土）
- 9月13日（水）：佐賀大学医学部保健学科にて講演（4年生対象、高松）
- 10月18日（水）：国土交通省・海ノ中道海浜公園UD委員会（白土）
- 10月21日（土）：九州国際学生支援協会「博多街歩き」（留学生45人参加、白土）
- 10月25日（水）：福岡フレンドリークラブとの後期打合せ会（白土）
- 10月28日（土）29日（日）：サポートグループセミナー（大正大学、高松）
- 11月11日（土）：太宰府天満宮料理交歓会・反省会（KUFSA役員とともに。白土）
- 11月27日（月）：九州国際学生支援協会・理事会&講演会（白土）
- 12月4日（月）：福岡帰国留学生交流会にて、「西安—福岡帰国留学生会」会長・王氏の歓迎会（白土）
- 1月17日（水）：被害者支援ホットステーション・相談員研修にて講演「被害者の心理と支援」（福岡市、高松）
- 1月28日（日）：福岡帰国留学生交流会・例会—スリランカ同窓会副会長の歓迎会兼ねる（白土）
- 1月31日（水）：国土交通省海ノ中道海浜公園UD委員会（白土）
- 2月25日（日）：大正大学「セクシャル・マイノリティのためのサポート・グループ」についてのスーパービジョンのため、スタッフ5人が来福（箱崎、高松）。
- 2月3日（土）：九州シルクロード協会・研究会（白土）
- 2月5日（月）：九州シルクロード協会運営委員会（白土）
- 3月5日（月）：福岡帰国留学生交流会・役員会（白土）
- 3月27日（火）：太宰府天満宮・観桜会（白土、留学生課長、KUFSA、留学生100人）
- 3月31日（土）：福岡フレンドリークラブ解散式（留学生家族の支援や交流活動25年、白土）

8. その他

〈来訪者〉

- 6月19日（月）：九州インターンシップ協議会事務局（会長・九大総長）「留学生のためのインターンシップ企画案の件」（白土）
- 6月21日（水）：セトル株式会社・取締役一尾憲夫氏他、留学生課川添氏「国際村構想の件」（白土）

留学生センター FD 会2019

Faculty Development Meeting for the International Student Center 2019

はじめに

2019年1月16日(水)、留学生センターFD会を開催した。留学生センターから15名程度の出席者があり、小松太郎氏(上智大学教授、国際交流センター長)による講演と討論が行われた。非常に活発な討論が交わされ、充実した催しとなった。以下に講演要旨を掲載する。

文責：今井亮一(留学生センターFD委員)

留学生センターFD会2018年度

日時：2019年1月16日(水) 16:40-18:40

場所：日本ジョナサン・KS・チョイ文化館(中山ホール)

講演者：小松太郎先生(上智大学・総合人間科学部教授、グローバル教育センター長)

演題：高等教育におけるグローバル市民性教育について

講演要旨

筆者が勤務する大学では、時折会議の場で「グローバル人材」という表現について議論が起きる。「人材」は human resource と英語で訳され、それは企業や組織、国家が設定する目的のために生産的な活動を担える人々というニュアンスがある。高等教育機関の役割は、そのようなスキル育成に止まらず、主体的に物事を考え、より公平で持続的な社会の構築を担い、その中で自己実現を目指す市民の育成ではないか、という意識が教員の意識にある。国連の持続可能な開発目標(SDGs)は途上国・先進国両方に共通するものだが、その中で「グローバル市民性教育」が謳われている。そこでは多様な背景を持つ人々との共存の必要性が表現されている。国境を越えた人・モノ・サービスの移動が加速化する中、多様な背景を持つ人々と共生していくための知識・スキル・態度の獲得は待ったなしである。上智大学はその創立モットーとして「他者のために、他者と共に」を掲げている。その「他者」とは、自らの家族や知人のみならず、個人的な関係を持たない人々を指す。このような他者に対して関心や共感を持ち、地域コミュニティの内外で「共に生きる」ことが出来るかが、グローバル市民性の鍵と考える。

グローバル市民性は世界市民としての側面と、国内の多文化共生に生きる市民としての側面を持つ。国内では今後、外国籍の人々との共生がより多くの地域社会で現実となるであろう。多文化共生を好む好まざるを関係なしに、それは訪れる。そこでの鍵は異集団間の信頼関係を意味する「社会的

結束」である。個人的な情報を持たない他人同士が最低限の信頼関係を保ち生活空間を共有することが、多文化社会が機能していく上で必要である。学校教育は、多様な子どもたち、そしてその保護者や地域住民が集まり交流する場として社会的結束を促進する機能を持つ。他方、世界市民については少し異なる観点が必要である。なぜ遠く離れた地に住む人々との地球規模の共生が必要なのか、身近な人間関係や生活環境を重視し保守的と言われる今日の若者にとっては、その意義は自明ではないかもしれない。しかし、グローバル化に伴い国家の相互依存関係は従来にも増して強くなっている。また、貧困や紛争・災害などで生命・生活が脅かされている人々を思い、彼らのために支援の手を差し伸べるのは人間として至極当然のことでもある。さらに、人類は異文化間の接触により新たな知を生み出しきたことを考える、多文化共生は人々の探求心や進歩への希求を満たす機会ともなり得る。

近年、海外留学に代わるグローバル教育の機会として、COIL（オンライン国際交流学習）が日本の大学で導入されつつある。日本の大学で学びながら、海外の大学の教室とつながり、留学のような体験が出来るというものである。これまで経済的な理由等で海外留学が出来なかった学生にとって、このようなITを活用した機会が提供出来るのはメリットがある一方、留学の代替とはなり得ると考えるのは早急である。国内では多数派である日本人の学生は、海外で生活する体験を通して初めて「少数派」としての困難を体感する。この肌感覚は、他者や社会的弱者への共感力の醸成に欠かせない。「他者のために、他者と共に」が実態を伴うグローバル市民性教育に結実するために、このような共感力を養うグローバル教育を今後も模索していきたい。